

エゾノマツ



2015 冬季号 111

北海道ボランティア・レンジャー協議会

♪ 表紙 ♪

(絵と文) グロース千鶴子

夫の国イギリスでの冬の光景です。
田舎では人と出会うより羊たちに出会う方が常です。今年、穏やかに
「**メーでたい年**」でありますようにと願ひ描きました。

目次

2015年 冬季号 111号

巻頭言	副会長	五十嵐一夫 1
追悼文	顧問	田村允郁 2
お知らせ	会長	春日順雄 3
		30周年記念事業委員会 3
観察会報告	札幌市	大磯久美子 4
	札幌市	寺島良子 5
観察会資料 (鶴川)	平取町	川村桂介 6 ~ 11
研修会資料 (道北)	札幌市	道場 優 12 ~ 15
会員の活動	伊達市	木村益巳 16
	釧路市	大日向倫子 17
投稿	苫小牧市	谷口勇五郎 18
	江別市	内山恭子 19
連載	札幌市	成田伸一 20 ~ 21
	千歳市	宮本健市 22
	札幌市	田村允郁 23 ~ 24
自然観察NOW (NO. 7)	千歳市	宮本健市 25 ~ 26
下見時の話題提供資料 (11月)	千歳市	宮本健市 27 ~ 30
事務局便り	札幌市	室野文男 31
編集後記		

2015年度総会のご案内

日時 4月25日(土) 13時～

場所 札幌エルプラザ環境研修室(札幌市北区北8条3丁目)

総会前に行われる研修の講師は南部栄一さんです。昭和62年、第2回ボラレンティア・レンジャー育成研修会受講者でボラレンの先達者でもあります。

詳細は後日ハガキでご案内いたします。

雪に埋もれた新年

副会長 五十嵐一夫

会員の皆様、明けましておめでとうございます。平成 27 年を迎え皆様が健康で活動されますことをお祈り申し上げます。

会報エゾマツの新年号の巻頭言を受け持つようになり今年で 3 年目となります。例年はお節とお神酒に飽きた正月休みに執筆をしていましたが、今回はすっかり失念してしまいました。原因はタイトルのとおりです。

年末 30 日に 28cm、31 日に 19cm の降雪があり、家の周りで一仕事。31 日と元日は穏やかな夕日を眺めながらほっとしていましたが、気のゆるみを見透かすかのごとく、2 日 40cm、3 日 39cm、4 日 16cm、雪かきによる筋肉痛が癒える暇がまったくありません。1 日の雪かきは私の場合 3 時間が限度です。体力もさることながら気持ちが萎えてしまいます。冬場の運動不足解消のためと嘯き、買えない訳ではありませんが除雪機は持っていません。既に降雪累計は 430cm。昨年まで 3 年連続で降雪累計が 10m を超えています。今年はどうなることやら。

ふり返ると昨年は、7 月上旬、久々に稚内のメグマ湿原でツメナガセキレイに会い、大きな体と大きな声を楽しませてもらいました。サロベツ原野でシマアオジに期待しましたが願い叶わず。もうだめでしょうね。えりも町百人浜のヤマトキソウが当たり年でした。日高の山奥でアポイタチツボスマレに遭遇。超塩基性土壌であれば、あちこちに普通に見られることを再確認しました。美深町松山湿原で一輪だけ、朝露にぬれたオオバナノエンレイソウの透明花に出会いました。そういえば、会員同士のカササギ談議も記憶に新しいところです。あちこち歩いていると、いろいろな自然に出会い感動させられます。

大雪に嘆いてばかりもいられません。ただでさえ陰の季節なのですからここは己の体の中にエネルギーを貯めつつ冬と言えどもフィールドに出ることにしましょう。久々に冬芽のおさらい、フィールドサイン(足跡)のおさらいなどなど少し考えればネタにはつきません。雪深い冬を乗り切ってこそ、春の訪れに大きな喜びを覚えるのです。

川端功治氏をしのぶ

当会の顧問を務めている川端功治氏が、昨年11月18日にご逝去されました。享年96歳でした。川端功治氏は当会に創生期から関わってこられ、平成6年に副会長に就任されましたが、2代目の会長である大友健氏が事故にあい、会長代行を務めていました。平成12年、第3代の会長に就任し平成18年4月に退任するまで当会をリードしていただきました。退任後は顧問として大所高所から助言をしていただいたことは会員の皆様はご承知のことでしょう。

川端功治氏は、大正7年3月31日の生まれで、略歴は次の通りです。

昭和11年	庁立旭川中学校卒
昭和14年	北海道帝国大学農学部林学実科卒
昭和31～37年	八雲、東瀬棚、函館営林署長
昭和37～47年	函館営林局、利用課長、事業部長
昭和47～58年	王子製紙 高谷木材勤務

平成18年には「瑞宝小綬章」を叙勲され、当会ではお祝いの会を企画実施したところです。

80歳をこえても体力は衰えず、母校の北大や自宅の周辺または三角山に出かけていたときいていますし、野幌森林公園での当会の観察会には顧問として、3年ほどまえまではほとんど欠席なく参加していました。観察会での解説は豊富な知識と見識を軽妙洒脱な語りで披露して参加者ばかりか私たち会員にも大きな種をまいていただきました。観察会の在り方や自然にたいする姿勢については、会報「エゾマツ」を通して私たちに常に語りかけていました。会報の巻頭言の幾つかを抜粋します。

観察会に参加して数多くのお客様を案内する会友諸兄が行程を終え解散を宣言してホッと一息ついたとき、さようならの挨拶やお礼の言葉をやりとりしながらこみあげてくるのは、今日一日が無事で楽しく終わったことの喜びと感謝でありましょう。……解散時の時に参加者から「楽しい一日をどうも有り難う」の声が交わされて嬉しさがこみあげてまいります。なんとしても無事故の観察会を守り抜きたいと思っておりますので、会員各位の献策指導鞭撻を期待致します。

(エゾマツ No.65 巻頭言より)

私たしたちは生活や会合で発言し得る場が沢山あると思えます。今年は大いにお喋りをする年としましょう。これはよい考えだと思ったら積極的に発言しましょう。このことが当会を発展させる最高の道のりと信じております。

(エゾマツ No.76 巻頭言より)

平成7年6月発行のエゾマツ No.33に、川端功治氏は「天寿」との題で寄稿しています。その文章の一節に「仏教雑学」の書を引用しながら次のように述べています。

「…人が死ねば天界に昇るが、ここは永住する所ではない。天にも寿命があつて再び人間に生まれ変わるか、地獄に墮ちるか、はたまた待望の極楽へ転任するかに振り分けられる。天の寿命は事故死や病死はありえない。全ての人老衰死であつて、さながら崩れ落ちるような死にかたである」と記し、「人間はより永い寿命を目指して懸命に努力しなければならないことになる」とも述べています。

川端功治氏は、まさしくこの考え方を身を持って実践され天寿を全うされた生涯でした。ここに改めて当会の発展に寄与されたことに感謝し、謹んで哀悼の意をささげます。

札幌市東区 田村允郁 記

《お知らせ》

① レベルアップ研修会～学ぶボラレンの気風作りの一つの試み

ボラレン会長 春日順雄

テレビで、何人もの芸人を育てた津軽三味線のオッ師匠さんが、「芸には底がないからな」といいながら練習に励む姿を見ました。自然の案内人のボラレンも「底の無い深みをもつ自然」を相手にしています。ですから、自然の案内人の完成した姿はないでしょう。「生涯学ぶ」・「生涯楽しむ」姿こそが大事にされることです。

ボラレンは、「いい自然の案内人」に育つために「学ぶボラレンの気風作り」に力を入れてきました。その一つとして、「レベルアップ研修会」を計画しました。初めての、しかも野心的な試みです。会員諸氏集い、いい研修会を実現したいと思います。多忙でしょうが、会員諸氏のご参集をお願い申し上げます。

※ 詳細は同封のチラシをご覧ください。

② ボラレン30周年記念事業 ～自然観察ハンドブック作成～

30周年記念事業推進委員会

記念冊子のコラム掲載記事を募集します

北海道ボランティア・レンジャー協議会は1986年8月に設立され今日まで全道各地で自然観察会を主催し自然保護思想の啓蒙に努めてきました。2015年には30周年を迎えることから昨年、30周年記念事業推進委員会を設置し検討を進め、記念講演会開催と自然観察ハンドブックの作成をすることとしました。

ハンドブックの内容は、20周年事業で発刊したものと同様、植物と鳥を中心に近似種の見分け方に特化するものとし、現在委員会で掲載種の絞込みと解説文作成を進めていますが、道内全域に居住している会員から、その地域に行かなければ見ることの出来ない生物（植物・鳥に限定せず）についてのコラムを募集しハンドブックに掲載したいと考えています。

下記の要領でコラムを募集します。ふるって応募下さいますようお願い申し上げます。

記

- 1 募集内容 地域固有種に関するコラム（30周年記念ハンドブックに掲載）
字数 200～300字程度 固有種の写真
- 2 期 日 平成27年3月末日
(解説文、写真が間に合わなければコラムのテーマだけでも可)
- 3 その他 応募多数の場合は、委員会で掲載種の選定、字数調整をさせていただきます。
- 4 提出先 〒061-0234 石狩郡当別町西町28-12 五十嵐 一夫
FAX 0133-23-0604
E-mail fishtail@zpost.plala.or.jp

「秋のありがとう観察会」に参加して

2014年11月9日

札幌市豊平区 大磯久美子

秋の変わりやすい天気の間、雨も降らず散策には最適な1日でした。今回は5人程のグループになり、ボランティアガイドの方も2人ついて下さいました。もうすぐ雪が降る森は、花も終わり葉も散り夏では見えにくかったヤドリ木も良く見え、赤や黄の実も間近に見る事が出来ました。ヤドリ木の根の輪切り標本を見せて頂きました。一見ちょっと木についているだけに見えるヤドリ木が、ここまで寄生した木の内部にしっかり根を張りのぼしているとは驚きでした。

しかもその根の先からまた芽を出しているとは。種や胞子が飛んでしまった後のオウバユリやキノコは、それらを遠くへ飛ばす為の構造の工夫がよくわかり、来年は花やキノコを見る時の視点も変わりそうです。コクワの実はなぜ渋いか？多数の動物に食べてもらって、より広い範囲に繁殖する為。

ツチガエルのオタマジャクシとエゾサンショウウオが同居すると、オタマジャクシはより食べられにくいように頭を大きくし、エゾサンショウウオはより食べやすくする為に口を大きくする、等々。

なるほどと合点がいくように面白くわかりやすい解説に時間のたつのも忘れてしまい、2時間半の行程もあっという間でした。それにしても自然界の生存競争は「癒し」などとは程遠い、すさまじいせめぎ合いと調和の産物であると思うと、万物の奥深さに圧倒されます。人間の力は大木ですが、それでも自然界に組み込まれたほんの一部にすぎないと思うと、なぜか心が落ち着きます。これが自然に抱かれるという事なのでしょうか。花がない観察会の思いがけない発見でした。

ありがとう観察会について

この観察会は、ボラレン会員からの呼びかけによって平成11年度から始まり今回で31回目となりました。春、秋の年2回森への感謝の気持ちを込めてゴミを拾いながらの観察会です。観察会に参加して下さる方はゴミと森と人との関係に意識が高いように感じます。

日常的に森を散歩する人がゴミを拾っていることもあり以前よりゴミは少なくなっていますが意識を持ってもらう事は大切と思います。

この夏に横浜から来たという人に「この森はゴミがなく気持ちがよい」と言われボラレンの一員としてうれしかったです。

広報部 内山恭子

西岡公園自然観察会

2014年11月23日(日)

札幌市 寺島良子

同じ森でも季節が変わるとまた別の表情を見せてくれる。葉を落として見晴らしの良くなった単調な色あいの森には何が待っているだろう。最初にトウヒやマツの実のつき方の違いを教わり、次に目についたのが頭上に花火のように広がったハリギリの実。ヤドリギには白、黄、赤色の実があり、ヨーロッパではクリスマスの飾りに使うなど樹木にまつわる興味深い話が尽きない。

枯葉の積もった足もとには、来春の花芽をつけて準備万端のナニワズ、フデリンドウやイチャクソウが見え隠れしていた。サイハイランやトケンラン(?)の葉々も見られ、開花した姿を想像して心が弾む。

柳の木では、枝を10センチぐらい切って茹でた汁が痛み止めの代用になるという。青葉が茂っていたらけっして気づかないであろう。ウスタビガの繭殻、クスサンの網目状の繭殻など、その細密な構造に驚く。

晩秋の森には面白い発見がいっぱいだ。



ウスタビガのまゆ



クワコのまゆ



クスサンのまゆ

1本のヤマグワに3種のまゆが
ついていました。

✿ 写真提供は宮津京子さんです。

平取温泉森林公園の植物

1. はじめに

平取温泉森林公園は二風谷ファミリーランドともいい、パークゴルフ場やテニスコート、ゲートボール場、スケートリンクなどのスポーツ施設や冒険遊具のある広場やオートキャンプ場なども整備され、また回りの豊かな自然も楽しめる滞在型のレジャーランドである。平取温泉はこの敷地内にあり、日帰りの入浴のみだった施設が6月16日より宿泊ホテルとしてプレ・オーブンし、今までの温泉もこのホテルの中に移設・改装され、その名称も「びらとり温泉ゆから」として生まれ変わったばかりである。

森林公園は沙流川の支流のカンカン川とマカウシの沢川に左右からぐるっと抱かれるように囲まれている丘陵地で、2つの川の両岸に残された二次林とカラマツなどの人工林の植生で構成されている。公園内は、2つの川に沿って遊歩道が敷かれ、のんびり歩きながら四季の植物を楽しむことも出来るようになっている。

2. 森林公園の植生と植物相

(1) マカウシの沢川兩岸の植物

兩岸の植生は、主にミズナラやコナラが優占する落葉広葉樹林で、イタヤカエデ(エゾイタヤ)、ハルニレ、サワシバ、シナノキ、オオバボダイジュ、ヤマグワ、キタコブシ、ヤマモミジ、カツラ、ケヤマハンノキ、シラカンバ、エゾヤマザクラ、オニグルミ、アカシデ、ハシドイ、ミツデカエデ、イヌエンジュ。ホオノキ、ヤチダモ、オノエヤナギ、ダケカンバ、クロビイタヤ、アサダなどの高木や亜高木が見られる。

低木では、エゾニワトコやミツバウツギが多く、その他オニウコギ、ノリウツギ、ツリバナ、クマイチゴなども見られる。

また蔓性の木本ではヤマブドウ、ツタウルシ、チョウセンゴミシ、マタタビ、ノブドウ、ゴトウヅル、ナワシロイチゴなどが見られる。

春季 林床では、アズマイチゲ、カタクリ、エゾエンゴサク、ニリンソウ、キバナノアマナなどの春の妖精たちが見事な群落を作り、フクジュソウやケタチツボスミレ、キジムシロなども見られる。遅れてユリ科のシラオイエンレイソウやミヤマエンレイソウ、エンレイソウ、ギョウジャニンニク、オオシュロソウ、ユキザサなども群生して出てくる。

小さな沢の回りや湿地では、ヒトリシズカやネコノメソウ、チシマネコノメソウ、マルバネコノメソウ、レンブクソウ、ノミノフスマ、オオバタネツケバナなども見られる。

日当たりのよい林床や草地では、タガネソウやヒカゲスゲ、サッポロスゲ(ハナマガリスゲ)なども群生して見られる。

個体数は少ないが、ワニグチソウやセイタカスズムシソウ、ウメガサソウ、ササバギンラン、

ヒトツバイチャクソウ、イチヤクソウなども見られる。

夏季 (6月中旬以降)には、アキタブキやエゾイラクサ、オオイタドリ、オオヨモギなどがそれぞれ大きな群落を作り、コンロンソウやチゴユリ、ヤマハタザオ、ヤブニンジン、オオヤマフスマ、キクムグラ、ヤマブキショウマ、エゾカラマツ、クルマバツクバネソウ、ノビネチドリ、コケイラン、タチハコベ、ミミナグサ、クサノオウ、アマニュウ、クルマユリ、ウマノミツバ、フタリシズカ、ダケゼリ、ミツバ、アオチドリ、トンボソウ、オオウバユリ、オカトラノオ、オオダイコンソウ、ウド、ミツバベンケイソウ、ヤブジラミ、ムカゴイラクサ、ヨブスマソウ、エゾノヨロイグサ、ノブキ、ウシハコベ、スズラン、トボシガラ、オオトボシガラ、オニウシノケグサ、ヤマカモジグサ、ヤマヌカボ、イブキヌカボ、イヌヨモギ、オドリコソウ、キンミズヒキ、チョウセンキンミズヒキ、希少種のおオアカネなどが見られる。

小湿地では、ミズホオズキ、ノミノフスマ、オオバタネツケバナ、スカシタゴボウ、ツリフネソウ、キツリフネ、セリ、ミソソバ、チシマアザミ、ハイキンポウゲ、オオバセンキュウ、ヤマキツネノボタン、ビロードスゲ、イワアカバナ、イグサ、アメリカセンダングサ、コバンコナスビ、オオカワズスゲ、ガマ、オニシモツケ、アブラガヤ、バイケイソウなどが見られる。

秋季 (9月以降)には、ヤブマメ、ツユクサ、ハエドクソウ、ヤマニガナ、ヒメムカシヨモギ、ハナダテ、ヤマハッカ、コシオガマ、ツリガネニンジン、ミヤマアキノキリンソウ、ミズヒキ、ミツバフウロ、タニソバ、エゾトリカブト、ミヤマヤブタバコ、ケフシグロ、イヌトウバナ、ハンゴンソウ、ミミキオン、モミジガサ、クサコアカソ、オトコエシ、エゾゴマナ、ヒメノガリヤス、ヤマハハコ、サラシナショウマなどが見られる。

また、マカウシの滝の壁にはダイモンジソウやエゾクロクモソウも見られる。

シダ類では、トクサ(群生)、オシダ、クサソテツ、ミヤマシケシダ(ハクモウイノデ)、クジヤクシダ、ヤマドリゼンマイ、イッポンワラビ、シラネワラビ、イヌガンソク、イワシロイノデ、ヘビノネゴザ、イワガネゼンマイ、フユノハナワラビなどが見られる。

(2) カンカン川ガローと周辺の植物

ガローや周辺の植生は、マカウシの沢川兩岸と大差はないように思われる。

春季には、エゾノイワハタザオやオクエゾサイシン、ツルネコノメソウ、ヒメカンスゲなどが、夏・秋季にはヤマブキショウマ、ダイモンジソウ、エゾクロクモソウ、シラオイハコベ、ヒメノガリヤス、イワデンダなどが見られる。

ガロー周辺丘陵地の斜面には、アオダモ(コバノトネリコ)やタチヤナギ、サワシバ、ケヤマハンノキ、ダケカンバ、アカシデ、ハルニレ、カツラ、イタヤカエデ、ミズナラ、エゾヤマザクラ、キタコブシ、ヤマモミジ、ヤマナラシ、ハシドイなどの高木や亜高木が見られる。

林内では、タラノキ、ニシキギ、コマユミ、ノリウツギ、エゾニワトコなどが見られる。

林床では、フッキソウ群落、トクサ群落、エゾミヤコザサ群落をはじめ、オクエゾサイシン、コハリスゲ、アキカラマツ、オオハナウド、ヒトツバイチャクソウ、カワミドリ、キンミズヒキ、ミズ、ヒルガオ、エゾトリカブト、ミヤマエンレイソウ、エゾクロクモソウ、ユキザサ、アズマイチゲ、コンロンソウ、マイヅルソウ、フクジュソウ、ヒメイチゲ、カタクリ、オオアマドコロ、アマニュウ、オニシモツケ、ヨブスマソウ、ヒメカンスゲ、クルマバツクバネソウ、クルマユリ、

ツルネコノメソウ、スズラン、カノツメソウ、ヒメノガリヤス、クジャクシダ、ミヤマシケシダ、オシダ、コウヤワラビなどが見られる。

(3) カラマツ人工林の植物

人工林のカラマツ植林は二次林のミズナラーコナラ林に接して形成されているが林床はエゾミヤコザサに優占され草本類は少ない。

テニスコートやスケートリンクは、カンカン川の左岸側にあり、丘陵地の斜面は、やはりミズナラーコナラ群落、ミズナラーエゾミヤコザサ群落になっており、イタヤカエデ、ヤマモミジ、サワシバ、イヌエンジュ、カシワ、コナラ、エゾヤマザクラ、ダケカンバなどが目立っている。低木のヤマウルシ、ヤマハギ、ツリバナ、ノリウツギ、ミツバウツギなども見られる。エゾミヤコザサの殆ど無いところでは、ジンヨウイチヤクソウが群落を作り、ミヤマハンショウヅルやチヨウセンゴミシ、アズマスゲなども群生してみられる。その他ミヤマエンレイソウ、オオアマドコロ、マイヅルソウ、ユキザサ、ヒメカンスゲ、アズマイチゲ、ヤマハハコ、オトコヨモギ、キジムシロ、ツリガネニンジン、ミツバベンケイソウ、アキカラマツ、ミヤマアキノキリンソウ、ヨブスマソウ、ハンゴンソウ、ウド、オオウバユリ、クルマユリ、希少種のジガバチソウ、ササバギラン、セイタカスズムシソウ、ヒトツバイチヤクソウ、ウメガサソウなども出てくる。

池のある日本庭園の周辺では、ミヤマウズラやヒナスミレの群生地があり、池の回りにはミゾカクシ（アゼムシロ）やイヌゴマ、エゾイヌゴマ、オオカサスゲ、ジョウロウスゲ、タニガワスゲ、ガマなども見られる。

東屋のある二つの川の合流点の湿地では、オオカサスゲ、サンカクイ、ピロードスゲ、ヒゴクサ、サドスゲ、タニガワスゲ、オオカワズスゲ、クロアブラガヤなどのカヤツリグサの仲間、エゾノサヤヌカグサやツルヨシ、ミノゴメなどのイネ科の仲間、エゾノキヌヤナギやオノエヤナギ、バッコヤナギ、イヌコリヤナギ、カワヤナギ、タチヤナギなどのヤナギの仲間、ヘラオモダカ、サジオモダカ、それにエゾノカワジシャやムシクサなども見られる。

(4) キャンプ地やスポーツ施設、遊具場の植物

各施設の中はナガハグサの芝生になっていて、シロツメクサ、アカツメクサ、セイヨウタンポポ、コウリンタンポポ（多い）、エゾノギシギシ、ヒメスイバ（多い）、シロザ、アカザ、ヒメジョオン、アラゲハンゴンソウ、コニシキソウ、コメツブウマゴヤシ、コテングクワガタ、コメツブツメクサなどの帰化植物をはじめへビイチゴ群落、オオチドメ群落、セントウソウ群落、コケオトギリ、スズメノカタデ、オオバコ、イヌタデ、オオイヌタデ、タニソバ、ネバリタデ、スマイレ、エゾタツナミソウ、ヤブマメ、エゾノタチカタバミ、クサノオウ、ゲンノショウコ、ツリガネニンジン、ツメクサ、ナギナタコウジュ、オニタビラコなどが入り込んでいる。施設の中に残されている樹木は、シラカンバ、ウダイカンバ、ハルニレ、アサダ、ヤマモミジ、アカイタヤ、ミズナラ、コナラ、ミズキ、オニグルミ、ハシドイなどがあり、アカマツ、イチイ、トチノキ、エゾヤマツツジ、エゾシャクナゲ、ノムラカエデなどが移植されている。

平取町森林公園の植物目録

区 分	科 名	和 名
1. シダ植物	トクサ科	スギナ、トクサ、
	ハナヤスリ科	エゾフユノハナワラビ
	ゼンマイ科	ヤマドリゼンマイ
	ワラビ科	オオレンシダ、ワラビ、クジャクシダ
	オシダ科	イヌガンソク、クサソテツ、コウヤワラビ、イワデンダ、イワシロイノデ、 ホソイノデ、シラネワラビ、イッポンワラビ、ミヤマシケンダ、オシダ ヘビノネゴザ、イワガネゼンマイ
	ヒメシダ科	ヒメシダ
2. 種子植物		
・ 裸子植物	イチイ科	イチイ (移植)
	マツ科	トドマツ (移植)、カラマツ (移植)
・ 被子植物	ガマ科	ガマ
	イネ科	エゾミヤコザサ (オオクマザサ)、イブキヌカボ、ナガハグサ、ウシノケグサ、 オニウシノケグサ、ヒロハウシノケグサ、スズメノテッポウ、オオスズメノテッポウ トボシガラ、オオトボシガラ、ヤマカモジグサ、コウボウ、ミノゴメ、ヤマヌカボ、 ヌカボ、ハネガヤ、キツネガヤ、ハルガヤ、エノコログサ、スズメノカタビラ、 ハイコヌカグサ、コヌカグサ、カモガヤ
	カヤツリグサ科	ヒゴクサ、エナシヒゴクサ、アブラガヤ、クロアブラガヤ、アオスゲ、 イトアオスゲ、オオイトスゲ、サンカクイ、ハナマガリスゲ、タガネソウ、 コハリスゲ、ヒメカンスゲ、ヒカゲスゲ、アズマスゲ、ピロードスゲ、 オオカワズスゲ、カサスゲ、オオカサスゲ、ヒメスゲ、タニガワスゲ、 サドスゲ、ジョウロウスゲ、ヒメクダ
	サトイモ科	マムシグサ、ヒメザゼンソウ、
	ツユクサ科	ツユクサ、
	イグサ科	イグサ、クサイ、スズメノヤリ、ヌカボシソウ、ヤマスズメノヒエ、 ヒロハノコウガイゼキショウ、ヒメコウガイゼキショウ、
	ユリ科	シュロソウ、キバナノアマナ、ギョウジャニンニク、オオウバユリ、クルマユリ、 カタクリ、キジカクシ、ユキザサ、マイヅルソウ、チゴユリ、ワニグチソウ、 スズラン、クルマバツクバネソウ、エンレイソウ、ミヤマエンレイソウ、 シラオイエンレイソウ、ヒメニラ、ホソバナアマナ、ホウチャクソウ、 オオアマドコロ
	ラン科	ノビネチドリ、ネジバナ、ミヤマモジズリ、コケイラン、アオチドリ、トンボソウ、 ミヤマウスラ、セイタカスズムシソウ、ササバギンラン、ジガバチソウ、
	センリョウ科	ヒトリシズカ、フタリシズカ、
	ヤナギ科	タチヤナギ、オノエヤナギ、バッコヤナギ、キヌヤナギ、イヌコリヤナギ、 エゾヤナギ、カワヤナギ、ヤマナラシ、ドロノキ、
	カバノキ科	アカシデ、サワシバ、アサダ、シラカンバ、ダケカンバ、ウダイカンバ、ハンノキ、 ケヤマハンノキ、
	ブナ科	ミズナラ、コナラ、クリ、
	エゴノキ科	ハクウンボク、
	トチノキ科	トチノキ、
	クワ科	ヤマグワ、カラハナソウ、
	ニレ科	ハルニレ、
	ビャクダン科	カナビキソウ、
	イラクサ科	エゾイラクサ、ムカゴイラクサ、アカソ、クサコアカソ、ミズ、
	ウマノスズクサ科	オクエゾサイシン、
	タデ科	ミズヒキ、ミゾソバ、オオイタドリ、ハナタデ、オオイヌタデ、 イヌタデ、ネバリタデ、タニソバ、アキノウナギツカミ、 エゾノギシギシ、ナガバギシギシ、イシミカワ、ヤノネグサ、 ハイミチヤナギ、ゴウシュウアリタソウ、ヒメスイバ、
	アカザ科	シロザ、アカザ、
	ナデシコ科	タチハコベ、オオヤマフスマ、ミミナグサ、シラオイハコベ、 ノミノフスマ、ミヤマハコベ、ウシハコベ、ハコベ、ツメクサ、オオツメクサ、 カラフトホソバハコベ、ホソバツメクサ、

2. 種子植物 ・被子植物	キンボウゲ科	ミヤマハンショウヅル、アズマイチゲ、ヒメイチゲ、ニリンソウ、フクジュソウ アキカラマツ、エゾカラマツ、エソトリカブト、サラシナショウマ、 ルイヨウショウマ、ヤマキツネノボタン、ハイキンボウゲ、エゾノリュウキンカ
	カツラ科	カツラ
	メギ科	ルイヨウボタン、
	モクレン科	ホオノキ、キタコブシ、ハクモクレン（移植）、チョウセンゴミシ、
	ミカン科	キハダ
	ケシ科	クサノオウ、エゾエンゴサク、ムラサキケマン、エゾキケマン、
	アブラナ科	オオバタネツケバナ、コンロンソウ、ヤマハタザオ、ミヤマハタザオ、 スカシタゴボウ、イヌナズナ、シロイヌナズナ、
	ベンケイソウ科	ミツバベンケイソウ、
	ユキノシタ科	エゾクロクモソウ、ダイヤモンドソウ、ネコノメソウ、ツルネコノメソウ、 チシマネコノメソウ、マルバネコノメソウ、ノリウツギ、ツルアジサイ、
	バラ科	ヤマブキショウマ、キジムシロ、オニシモツケ、キンミズヒキ、 チョウセンキンミズヒキ、オオダイコンソウ、ダイコンソウ、ヘビイチゴ、 ヒメヘビイチゴ、ミツモトソウ、エゾノミツモトソウ、エゾヤマザクラ、 アズキナシ、ナナカマド（移植）
	マメ科	ヤブマメ、イヌエンジュ、ヤマハギ、アカツメクサ、シロツメクサ、 コメツブツメクサ、ヌスビトハギ、ヤブハギ、クサフジ
	フウロソウ科	ミツバフウロ、ゲンノショウコ、
	カタバミ科	エゾタチカタバミ、
	トウダイグサ科	コニシキソウ
	ツゲ科	フッキソウ、
	ウルシ科	ツタウルシ、ヤマウルシ、
	ニシキギ科	ニシキギ、コマユミ、ツリバナ、
	ヒルガオ科	ネナシカズラ、ヒルガオ、
	ウコギ科	ウド、オニウコギ、タラノキ、
	ミツバウツギ科	ミツバウツギ
	カエデ科	ヤマモミジ、イタヤカエデ、ベニイタヤ、ミツデカエデ、クロビイタヤ
	ツリフネソウ科	キツリフネ、ツリフネソウ、
	ブドウ科	ヤマブドウ、ノブドウ、
	シナノキ科	シナノキ、オオバボダイジュ、モイワボダイジュ、
	サルナシ科	マタタビ、サルナシ、
	オトギリソウ科	トモエソウ、オトギリソウ、コケオトギリ、エゾオトギリ、
	スマレ科	スマレ、ツボスマレ、アカネスマレ、ケタチツボスマレ、ヒナスミレ ミヤマスマレ、エゾノタチツボスマレ
	アカバナ科	イワアカバナ、カラフトアカバナ、ミズタマソウ、ウシタキソウ、 アレチマツヨイグサ、
	セリ科	ヤブニンジン、ミツバ、ウマノミツバ、セリ、セントウソウ、オオバセンキュウ アマニュウ、オオハナウド、オオチドメ、エゾノヨロイグサ、カノツメソウ、 ヤブジラミ、
	イチヤクソウ科	イチヤクソウ、ヒトツバイチヤクソウ、ジンヨウイチヤクソウ、ウメガサソウ
	ツツジ科	エゾムラサキツツジ（移植）、ヤマツツジ（移植）、ハクサンシャクナゲ（移植）、
	ムラサキ科	ノハラムラサキ、ヒレハリソウ、
	サクラソウ科	サクラソウ、オカトラノオ、コバンコナスビ
モクセイ科	アオダモ、ハシドイ	
ナス科	イヌホオズキ、	
シソ科	ヤマハッカ、イヌトウバナ、カワミドリ、ナギナタコウジュ、オドリコソウ、 エゾタツナミソウ、ジャコウソウ、イヌゴマ、エゾイヌゴマ、ヒメナミキ、ハッカ、 クルマバナ、エゾシロネ	
ゴマノハグサ科	ミゾホオズキ、コシオガマ、アゼナ、エゾノカワジシャ、タチイヌノフグリ、 トキワハゼ、ムシクサ、ピロードモウズイカ、ヒキヨモギ、エゾクガイソウ	
オオバコ科	オオバコ	
アカネ科	クルバマソウ、キクムグラ、オオアカネ	
スイカズラ科	エゾニワトコ	
レンブクソウ科	レンブクソウ	
オミナエシ科	オトコエシ	
キキョウ科	ツリガネニンジン、アゼムシロ	

2. 種子植物 ・被子植物	キク科	ヤマハハコ、ミヤマアキノキリンソウ、ヒメジオン、ハルジオン、エゾゴマナ、アキタブキ、ハンゴンソウ、ミミキオン、アラゲハンゴンソウ、モミジガサ、ヨブスマソウ、オオヨモギ、イヌヨモギ、ノブキ、チシマアザミ、エゾヤマアザミ、タカアザミ、アキノノゲシ、コウゾリナ、アメリカセンダングサ、ミヤマヤブタバコ、セイヨウタンポポ、キクイモ、コウリタンポポ、センボンヤリ、オニタビラコ、ネバリノギク、オオアワダチソウ、オオハンゴンソウ、ノボロギク、コシカギク、ヤナギタンポポ
------------------	-----	--

移植された木本類

平成7年以降に森林造成・林相改良が目的の「二風谷地区生活環境保全林整備事業」として移植

1. 平取町森林公園内にも自生する樹種

エゾヤナギ、ミズナラ、ケヤマハンノキ、ハルニレ、キタコブシ、ヤマモミジ、ハウチワカエデ、エゾヤマザクラ、イヌエンジュ、カツラ、ツリバナ、ニシギキ、カンボク

2. 平取町内の丘陵地や山地にも自生する樹種

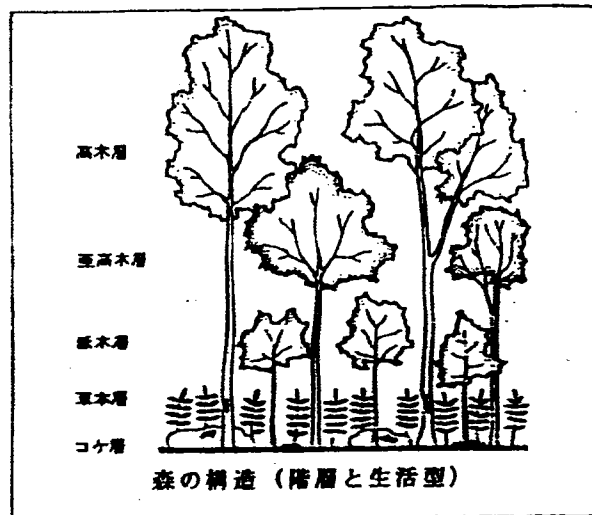
イチイ、キタゴヨウ、シンパク、ナナカマド、マユミ、エゾムラサキツツジ、ムラサキヤシオツツジ

3. 北海道または日本国内にも自生する樹種

クロマツ、イタヤカエデ、シダレザクラ、コブシ、トチノキ、クロミノウグイスカグラ、ドウダンツツジ、シヤクナゲ、キレンゲツツジ、リュウキュウツツジ、エゾノコリンゴ、タニウツギ、ヤマツツジ、アキグミ

4. 外国原産の樹種

ムクゲ (中国)、クロフネツツジ (中国・韓国)



参照 明福「日本の植生」学習研究社より抜粋

大雪山の花チェック表

(実施場所) 黒岳

(道場優作成)

(チェック凡例: つぼみ○ / 開花◎ / 葉△ / 花終× / 実(種子)no1

実施日	2014年7月20日		実施コース		①黒岳7合目～頂上 ②頂上～黒岳石室途中					
番号	樹木	植物名	花色	月	写真	参考	場所	チェック	備考	外来種
2		アカミノエンレイソウ	白							
3		アカモノ	白							
4		アヤメ	青							
5		アマニュー	白							
6		アラシグサ	黄				①黒岳7合目～頂上	○		
7		イブキトラノオ	赤							
8		イワイチヨウ	白							
9		イワウメ	白				②頂上～黒岳石室途中	●		
10		イワオトギリ	黄							
11		イワギキョウ	青		○		①黒岳7合目～頂上	◎		
12		イワツツジ	赤							
13		イワヒゲ	白		○		②頂上～黒岳石室途中	◎		
14		イワブクロ	赤		○		②頂上～黒岳石室途中	◎		
15		ウコンウツギ	黄		○		①黒岳7合目～頂上	◎	大群生	
16		ウスユキトウヒレン	赤				②頂上～黒岳石室途中	△	北海道固有種	
17		ウズラバハクサンチドリ	赤		○		①黒岳7合目～頂上	◎		
18		ウラシマツツジ	黄		○		②頂上～黒岳石室途中	●		
19		ウラジロタデ	白		○		①黒岳7合目～頂上	◎		
20	○	ウラジロナナカマド	白		○		①黒岳7合目～頂上	◎		
21	○	エゾイソツツジ	白						北海道固有種	
22		エゾイチゲ	白				①黒岳7合目～頂上	△	北海道固有種	
23		エゾイワツメクサ	白		○		②頂上～黒岳石室途中	◎	大雪山固有種	
24		エゾウサギギク	黄		○		①黒岳7合目～頂上	◎		
25		エゾウメバチソウ	白		○		①黒岳7合目～頂上	◎		
26		エゾオヤマノエンドウ	青						大雪山固有種	
27		エゾオヤマリンドウ	青							
28		エゾクロクモソウ	赤				①黒岳7合目～頂上	△		
29		エゾコザクラ	赤		○		①黒岳7合目～頂上	◎	北海道固有種	
30		エゾシオガマ	白							
31	○	エゾシヤクナゲ	赤							
32		エゾゼンテイカ	黄							
33		エゾタカネスミレ	黄						北海道固有種	
34		エゾタカネツメクサ	白						北海道固有種	
35		エゾチドリ	白						北海道固有種	
36	○	エゾツツジ	赤		○		②頂上～黒岳石室途中	◎	大群生	
37		エゾノイワハタザオ	白				①黒岳7合目～頂上	◎		
38		エゾノシモツケソウ	白						北海道固有種	
39	○	エゾノタカネヤナギ	黄				②頂上～黒岳石室途中	△		
40		エゾノツガザクラ	赤				②頂上～黒岳石室途中	△		
41		エゾノハクサンイチゲ	白						北海道固有種	
42		エゾノマルバシモツケ	白		○		②頂上～黒岳石室途中	◎	北海道固有種	
43		エゾノヨヅバムグラ	白							
44		エゾノリュウキンカ	黄							
45		エゾノレイジンソウ	黄				①黒岳7合目～頂上	◎	北海道固有種	
46		エゾノハハコヨモギ	黄		○		②頂上～黒岳石室途中	◎	大雪山固有種	
47		エゾヒメクワガタ	青		○		①黒岳7合目～頂上	◎	北海道固有種	
48	○	エゾマメヤナギ	黄				②頂上～黒岳石室途中	△	大雪山固有種	
49		エゾミヤマツメクサ	白							
50	○	エゾムラサキツツジ	赤						北海道固有種	
51		エゾヤマゼンコ	白				①黒岳7合目～頂上	△		
52		エゾルリソウ	青				7合目リフト駅(植栽?)	◎	北海道固有種	

大雪山の花チェック表

(実施場所) 黒岳

(道場優作成)

(チェック凡例: つぼみ○ / 開花◎ / 葉△ / 花終× / 実(種子.no2)

実施日		2014年7月20日		実施コース		①黒岳7合目～頂上 ②頂上～黒岳石室途中		チェック	備考	外来種
番号	樹木	植物名	花色	月	写真	参考				
53		オオカサモチ	白		○	①黒岳7合目～頂上		◎		
54	○	オオカメノキ	白							
55		オオダイコンソウ	黄							
56		オオタチツボスミレ	青							
57	○	オオバスノキ	赤							
58		オオバタケイマラン	白							
59		オオヤマサギソウ	白							
60	○	オガラバナ	黄			①黒岳7合目～頂上		△		
61		オニシモツケ	白							
62	か	カラフトイチヤクソウ	白			①黒岳7合目～頂上		◎		
63		カラフトゲンゲ	赤							礼文島・日高山脈
64		カラマツソウ	白		○	①黒岳7合目～頂上		◎		
65		キバナノコマノツメ	黄		○	①黒岳7合目～頂上		◎		
66		キバナシオガマ	黄							大雪山固有種
67	○	キバナシャクナゲ	黄			①黒岳7合目～頂上		△		
68		ギンリョウソウ	白							
69		クモイリンドウ	白							大雪山固有種
70		クモマユキノシタ	白			①黒岳7合目～頂上		△		夕張岳・日高山脈
71	○	クロウスゴ	赤			①黒岳7合目～頂上		●		
72		クロミノエンレイソウ	白							
73	○	クロメノキ	赤			②頂上～黒岳石室途中		●		
74		クロユリ	赤							
75	○	ケヨノミ	黄							
76		コイチョウラン	黄							
77		コイワカガミ	赤							
78		コガネイチゴ	白			①黒岳7合目～頂上		◎		
79		コガネギク	黄		○	①黒岳7合目～頂上		◎		
80		コケイラン	黄							
81	○	コケモモ	赤			①黒岳7合目～頂上		◎		
82		ゴゼンタチバナ	白							
83		ゴバノイチヤクソウ	白							
84		コマクサ	赤		○	②頂上～黒岳石室途中		◎		
85		コメバノイチヤクソウ	白							
86	○	コメバツガザクラ	白			②頂上～黒岳石室途中		●		
87		コミヤマカタバミ	白							
88		コモチミミコウモリ	白			①黒岳7合目～頂上		○		
89	○	コヨウラクツツジ	赤							
90	さ	サンカヨウ	白							
91	○	シラタマノキ	白							
92	○	ジムカデ	白			②頂上～黒岳石室途中		△		
93		シラオイハコベ	白							
94		シラネアオイ	赤							
95		シラネニンジン	白			①黒岳7合目～頂上		◎		
96		シロサマニヨモギ	黄		○	②頂上～黒岳石室途中		◎		
97		ショウジョウバカマ	赤			①黒岳7合目～頂上		△		
98		ジンヨウキスミレ	黄							北海道固有種
99		ズラン	白							
100		ズダヤクシュ	白			①黒岳7合目～頂上		○		
101	た	ダイセツトリカブト	青		○	①黒岳7合目～頂上		◎		大雪山固有種
102		ダイセツヒナオトギリ	黄							大雪山固有種
103		タカネシオガマ	赤							
104		タカネスイバ	赤			①黒岳7合目～頂上		◎		
105		タカネトウウチソウ	白			①黒岳7合目～頂上		◎		
106	○	タカネナナカマド	白			①黒岳7合目～頂上		△		

大雪山の花チェック表

(実施場所) 黒岳

(道場優作成)

(チェック凡例: つぼみ○ / 開花◎ / 葉△ / 花終× / 実(種子.no3

実施日		2014年7月20日		実施コース		①黒岳7合目～頂上 ②頂上～黒岳石室途中		チェック	備考	外来種
番号	樹木	植物名	花色	月	写真	場所	参考			
107	○	ダケカンバ	黄			①黒岳7合目～頂上		△		
108		タチギボウシ	青			7合目リフト下(植栽?)		△		
109		チシマフウロ	青							
110		チシマアザミ	赤		○	①黒岳7合目～頂上		◎	北海道固有種	
111	○	チョウノスケソウ	白							
112		チシマアマナ	白							
113		チシマギキョウ	青			7合目リフト下(植栽?)		◎		
114		チシマキンレイカ	黄		○	②頂上～黒岳石室途中		◎	北海道固有種	
115		チシマクモマダサ	白						夕張岳・知床山系	
116		チシマゼキショウ	白			②頂上～黒岳石室途中		△		
117	○	チシマツガザクラ	赤		○	②頂上～黒岳石室途中		◎		
118		チシマニンジン	白			②頂上～黒岳石室途中		△		
119		チシマノキンバイソウ	黄		○	①黒岳7合目～頂上		◎	大雪山固有種	
120	○	チシマヒョウタンボク	赤		○	①黒岳7合目～頂上		◎		
121		チシマミクリ	白							
122	○	チングルマ	黄			7合目リフト下(植栽?)		●		
123		ツバメオモト	白							
124		ツボスミレ	白							
125		ツマトリソウ	白							
126		ツルアジサイ	白							
127		ツルコケモモ	赤							
128		トカチフウロ	赤		○	①黒岳7合目～頂上		◎		
129	な	ナガバツガザクラ	白							
130		ナガバキタアザミ	赤		○	①黒岳7合目～頂上		◎		
131		ナガバノモウセンゴケ	白						大雪山・道北	
132	○	ナナカマド	白			①黒岳7合目～頂上		△		
133		ノウゴウイチゴ	白			①黒岳7合目～頂上		◎		
134	○	ノリウツギ	白			①黒岳7合目～頂上		△		
135	は	ハイオトギリ	黄		○	①黒岳7合目～頂上		◎		
136		バイケイソウ	白			①黒岳7合目～頂上		△		
137	○	ハイマツ	赤			黒岳7合目～頂上～石室		●		
138		ハクサンチドリ	赤		○	①黒岳7合目～頂上		◎		
139		ハクサンボウフウ	白		○	①黒岳7合目～頂上		◎		
140		ハクセンナズナ	白		○	①黒岳7合目～頂上		◎		
141	○	ハナヒリノキ	黄							
142		ハリブキ	黄							
143		ヒツジダサ	白							
144	○	ヒメイツツジ	白						大雪山固有種	
145		ヒメイワタデ	白			②頂上～黒岳石室途中		◎	北海道固有種	
146		ヒメイワショウブ	白							
147		ヒメジャクナゲ	赤							
148		ヒメタケシマラン	白			①黒岳7合目～頂上		◎		
149		フタマダタンポポ	黄						北海道固有種	
150		ベニバナイチヤクソウ	赤							
151		ホソバウルップソウ	青						大雪山固有種	
152		ホソバノイワベンケイ	黄		○	②頂上～黒岳石室途中		●		
153		ホソバノキソチドリ	黄							
154	ま	マイヅルソウ	白							
155	○	マルバシモケ	白		○	①黒岳7合目～頂上		◎		
156		ムラサキヤシオツツジ	赤							
157		ミズバショウ	白							
158		ミツガシワ	白							
159		ミツバオウレン	黄			①黒岳7合目～頂上		◎		
160	○	ミネカエデ	黄			①黒岳7合目～頂上		△		

大雪山の花チェック表

(実施場所) 黒岳

(道場優作成)

(チェック凡例: つぼみ○ / 開花◎ / 葉△ / 花終× / 実(種子)no4

実施日		2014年7月20日		実施コース		①黒岳7合目～頂上 ②頂上～黒岳石室途中		チェック	備考	外来種
番号	樹木	植物名		参考		場所				
		花色	月	写真						
161	○	ミネザクラ	白					△		
162		ミネズオウ	赤				②頂上～黒岳石室途中	○	北海道固有種	
163		ミミコウモリ	白				①黒岳7合目～頂上	○		
164		ミヤマアカバナ	赤				①黒岳7合目～頂上			
165		ミヤマアケボノソウ	赤							
166		ミヤマエンレイソウ	白							
167		ミヤマオグルマ	黄							
168		ミヤマオダマキ	青							
169		ミヤマキンバイ	黄				②頂上～黒岳石室途中	△		
170		ミヤマキンポウゲ	黄		○		①黒岳7合目～頂上	◎		
171		ミヤマサワアザミ	赤		○		①黒岳7合目～頂上	◎		
172		ミヤマスミレ	青							
173		ミヤマセンキュウ	白				①黒岳7合目～頂上	△		
174		ミヤマダイゴンソウ	黄							
175		ミヤマタネツケバナ	白				①黒岳7合目～頂上	△		
176	○	ミヤマナナカマド	白				①黒岳7合目～頂上	△		
177		ミヤマバイケイソウ	白				①黒岳7合目～頂上			
178		ミヤマハンショウヅル	青							
179	○	ミヤマハンノキ	黄				①黒岳7合目～頂上	△		
180		ミヤマフタバラン	黄							
181	○	ミヤマホツツジ	白				①黒岳7合目～頂上	○		
182	○	ミヤマヤナギ	黄							
183		ミヤマリンドウ	青							
184		ムカゴトラノオ	白							
185		モウセンゴケ	白							
186		モミジカラマツ	白		○		①黒岳7合目～頂上	◎		
187		メアカンキンバイ	黄		○		①黒岳7合目～頂上	◎	北海道固有種	
188	や	ヤマハハコ	白				①黒岳7合目～頂上	◎		
189		ヤマブキシユウマ	白				①黒岳7合目～頂上	◎		
190		ヨコヤマリンドウ	青							大雪山固有種
191		ヨツバシオガマ	赤				①黒岳7合目～頂上	◎		
192	ら	リシリオウギ	白							利尻山・本州
193		リシリリンドウ	青							利尻山・夕張岳
194		リンネソウ	赤							
195		レブンサイコ	黄							
196	わ	ワタスゲ	白							
197										
198		エゾヤマゼンコ	白				②頂上～黒岳石室途中	△		
199		チシマイワブキ	白				①黒岳7合目～頂上	△	北海道固有種	
200		エゾミヤツメクサ	白							大雪山固有種
201		コエゾツガザクラ	赤							大雪山固有種
202		ニシキツガザクラ	赤							大雪山固有種
203		ノビネチドリ	赤							
204		ミヤマトウバナ	赤				①黒岳7合目～頂上	◎		
205										
206										
207										
208										
209										
210										
211										
212										
213										

「胆振地区で活動しています」

伊達市 木村益己

ボラ・レン会員の木村と申します。西胆振の片田舎に住み、多くの活動を行っている為、研修会などには出席する事はありませんでしたが、この度は苫小牧北大演習林でのボラ・レン研修会があり参加いたしました。ボラ・レンメンバーが植物などについてとても詳しいのに驚き、また案内を引き受けてくださった地元苫小牧の谷口さんも自然への造詣の深い方でした。谷口さんは観察会では「案内人」という立場で、初心者にもわかりやすい説明をしているという事でした。今回の研修会は考えるところが多く大変勉強になりました。感謝しております。

私の自然との関わりについて、少し書かせていただきます。●30数年前「アヤマ川自然公園」づくりの提案と企画(コンクリート三面張り護岸・林の伐採を取り止め 河畔林と自然のせせらぎを残す) ●16年前から「市民の自然観察会」(ネイチャーウォッチングクラブ)主宰。2014.2 解散。●15年前「縄文の森づくり」開始(北黄金貝塚)継続中・市民ボラ。●11年前「野草園づくり」開始(市開拓記念館内)継続中・市民ボラ。●10年位前から「伊達小学校でふるさと先生」として、写真展示、自然公園案内、先生と共同で授業参加。市民ボラ。●10年前「任意団体、森と水と人ネットワーク」立ち上げ。自然系のサロンとして出発。観察会・自然の講演・写真展示、市への提言などをおこなう。●3年前「森ネットをNPO法人へ」、「自然をまもり、自然をいかしたまちづくり」を目的として、活動を強化。自然観察会、座学・交流、自然の見どころづくり、展示・講話、自然調査、行政への提言・要望、会報・ホームページ作りなどを行っています。詳しくはホームページを。 <http://www12.plala.or.jp/MoriNet> です。ご訪問をお待ちします。

最後に、最近思っていることについて。

観察会などで大衆的な「身近な自然への理解を深める」活動の重要性を常々感じております。

もう一方で、最近の地球温暖化の事も大変気にかかります。と言うのは、今世紀末(80年余り後)に地球の気温は最大4.8℃上昇、海水面は最大82cm上昇するという、国連(IPCC)の警告があります。各国が努力してCO2削減を行えばそれよりずっとましな結果になるわけですが、今の世界は最悪な結果に向かってまっしぐらに進んでいるように見えるからです。日本でも超巨大台風の到来、異常な集中豪雨、竜巻の大型化など生活にさえ大きな影響が出始めています。温暖化は気候が凶暴化するという事です。このままでは、今世紀末以前に自然のシステムが制御出来ないところに達すると言われていています。大変恐ろしい事です。そうなっては、自然派として地域の自然を考えるだけでは、自然を守る事にはならないと思っているわけです。そこで、ささやかですが市の環境家計簿運動にも参加し、暖房によるCO2排出の減少、LED電球への交換、スクーターの利用など多少の対策も実施しているところです。

小さな体験からのスタート

釧路市 大日向倫子

爽やかな秋風を背に何度もあの林の中を歩いたのが、つい昨日の様に思える。「発表するのだから、まず現場でリハーサル！」を合言葉にグループで行動を起こしたあの日が、今日の私の出発点なのかも知れない。昨秋の育成研修は得るものが多く有、最終日の各班発表は学んだ事を実行に移す体験学習であった。もしやこの原稿も入会者への実践課題？と思いきや、先ずは研修通り提出へ・・・

道東の釧路は雪も少なく、冬は海からの冷たい浜風が頬にきつい。むしろ雪が降ると「今日はあったかいね」の言葉が出て子どもたちは（大人も）外遊び。更に夏は日本一涼しい事で有名になり、本州からも多くの長期滞在者が訪れる土地柄である。

この地の豊かな自然風土に触れながら、まずは少しずつ。身近なところより、「ネイチャーくしろ」を発信して見ようと思う。

写真、上は市街地にありながら野鳥や山野草等を散歩感覚で楽しめる自然の宝庫「春採湖」周辺で見られた秋の実り収穫のひとつコマ。ホウノキからゴツンと落ちた赤い実に群がるカラスを見て、「あれって美味しいのですかね、マーブルチョコみたいの・・・」。散策者の問いに私も思わず苦笑、今度カラスに味を聞いておきましょうねと。



冬は湖の全面結氷と共にまた白銀の世界が広がる。その昔ここでスケートの練習に励み、有名選手も育ったとの話から、自然の姿の懐の深さをも垣間見た様な気がした。

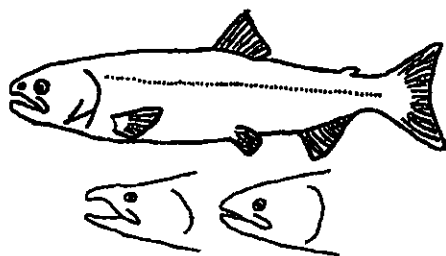
さて、現在も石炭坑内掘のある釧路市。冷えた朝の凜とした寒さの中、春採湖周辺を走る国内唯一の石炭列車の様子をお伝えして今回の初レポート提出？とさせて頂きたく。春日会長、「課題提出」はこんな感じでもよろしいのでしょうか。



ウヨロ川フットパスを行く

苫小牧市 谷口勇五郎

11月9日、某会で白老町のウヨロ川フットパスに出かけました。道央道の下を通り、オーシャンファーム（競走馬が余生を送る牧場）前に着く。大阪から来た老若4人と愛知の2人も、サケの産卵場所を見たいというので、一緒に行くことにしました。4~5頭の馬が見える、その1頭が近づいてきたので「可愛い」と言いながら、何人もが写真を撮っていました。フットパスの脇、牧場の境には、2~3mにもなる剪定していないイボタノキ（石狩低地帯以南に自生）の10本以上が紫黒色の果実を沢山付けていました。川沿いにはケヤマウコギの黒い果実の塊りが幾つか見えました。この若芽は山菜にもなるという。川岸に下りると、10月の大雨の時、2mぐらいいも水に浸かった跡に、枯草の繊維状の塊りが枝に少しづつ付いていました。川をのぞくと、サケがところどころに見えます。早は産卵床を掘るので、尾びれが白っぽく傷ついており、腹の横には1本の黒い筋があるはずなので、注意して見ても、良く分かりません。少し上流に行くと、数ヶ所にサケの集団が見えます。尾びれが白くなっているものと、そうでないものが混じっています。産卵行動に入っているのでしょうか。1匹の♀は約3,000個の卵を抱え、4~5回に分けて産むという。げんこつ大の石の間から砂粒を追い出し、尻びれを石の間に入れ、隙間や深さを確認してみと合わせて産卵する。上流から砂利をかぶせて、卵を埋めると2回目のくぼみが出る。産卵し、同様に数回産卵を繰り返す。昼1枚ほどの楕円形の少し高まりのある産卵床ができる。一腹全部は1日~1日半かかる。その後♀は他の♀に掘り返されないよう、その場に残り、死ぬまで守るという。新しい産卵床は藻の生えていない石が並ぶそうです。



サケ 下は繁殖期の頭部左♂右♀

サケマスふ化場に至るウヨロ川の支流イレスナイ川（約1.3km）の橋を渡りウヨロ川に沿ってフットパスを進む。吊り橋跡や大きな橋が半分流されている所を過ぎトラストの森に入る。橙色に紅葉したカラムツの遠景が美しい。滋養によいというチョウセンゴミシを1粒食べる。トラストの小屋で昼食後、歩き出すと、カケスが1羽木の上に見える。近くにカラスの巣に似て、その半分ぐらいのものが見えます。カケスがその中に入る「ヒナに餌をやっているぞ」「あっ、ほんとだ」「いや、今は子育ての時期じゃないぞ」「食べ物貯食しているのかな」で落ち着きました。

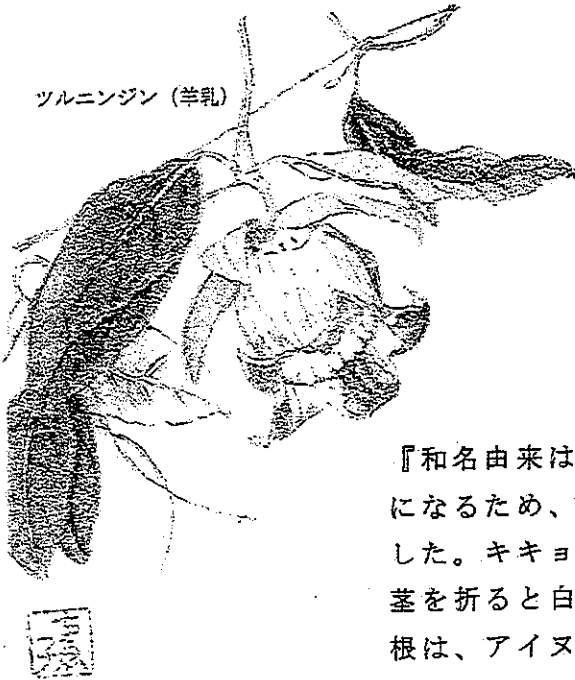
木の上の方ではカラスが何羽も鳴いています。10羽ぐらいのトビが上空で円を描いています。サケマスふ化場に続く流れに15cmぐらいの高さの板が堤状になっており、それを超えようとサケが何度も試み、たまに超えるものもいます。サケを溜める大きな水槽の中には数匹だけが泳ぎまわっていました。ダイサギらしい4羽を1羽のカラスが追いかけていました。牧場には20羽ぐらいのトビがあちこちに散らばっています。それらの鳥はホッチャレ（川に戻り繁殖を終えたサケ）を食べようとしているのでしょうか。

イレスナイ川を下り、ふ化場とウヨロ川の間にある、径1mほどの土管を通し、その上を歩けるようにしてある。土管の下流側には大きな石がごろごろし、かなりの傾斜もあります。その流れの中を、何度も何度も流されながら、上流めざすサケの姿は、本能行動とは言え、頭の下がるような思いがありました。見かねて、誰かが、邪魔になっている木片を取り除いていました。

「羊乳」って何？

江別市 内山燕子

ツルニンジン (羊乳)



今年は未年です。毎年、その年の干支に因む植物を描いた年賀状をくれる友がいます。今年はカットにあるような絵でした。絵は何の植物かすぐわかりましたが、「羊乳」という字に「アッそうか」と納得させられました。

植物の名前の由来は様々ですが、本によると『和名由来は根がチョウセンニンジンのように太く茎がツルになるため、また漢名は「羊乳」そうだったのかと知らされました。キキョウやポインセチアのようにツルニンジンも葉や茎を折ると白い液が出てくるのは周知のことです。また『塊根は、アイヌ民族にとってかつては重要な食糧のひとつでした。朝鮮では根をドドクと呼んで食用としてテレビドラマ「宮廷女官チャングムの誓い」の中でも調理されており宮廷料理の食材の一つです。そして白い液は切り傷の薬となり、根を干したものは「羊乳」とよばれ去痰薬に用いられる』と載っています。

植物標本作りを一緒にしている友が昨年ツルニンジンを押し葉標本した時に「細い根でも切れると白い液が止まらないほど出てきて難儀した」と言っていました。太い根なので半分に割って重石をかけようと思ったのですがこの溢れ出るミルクに根を割ることはあきらめたそうです。結局乾燥するまで何日も要したとのことでした。

植物好きの友達のお陰で、二つのことが結びついて新年からとても豊かな気分でした。一つのことから物事が繋がって広がって共有出来る過程が楽しいです。これはボラレンの活動にも通じるのではないのでしょうか？

♪ 今年6月ごろの予定で、北海道大学出版会より著者・梅沢俊さんの北海道

のシダ図鑑が発行となります。B5判です。♪

原始地球から共生の地球へⅡ

成田 伸一

微惑星の衝突により原始地球は次第に成長していきます。衝突によって放出した揮発性物質は、原始大気を形成します。原始大気の保温効果により、原始地球の表面にマグマオーシャンが形成されます。マグマオーシャンでは、金属鉄と珪酸塩の分化が起こります。比重の大きい金属層は地球の中心へ向かって沈んでいき、比重の軽いものは浮いてきて全体がひっくり返るような現象が起こります。このような現象を「オーバートーン」と言います。オーバートーンによって沈んでいったものは、金属質の核となりました。

地球が誕生した時は、中心部の金属核全体が熔融状態だったと考えられます。地球が徐々に冷えていくと金属核は中心から冷えて固体になり、内核と外核から構成される原始地殻が形成されたのでしょう。太陽の周りを飛び回っていた微惑星の数が減少すると、衝突の頻度も減少します。水蒸気と二酸化炭素からできていた原始大気はやがて冷却し、地表に海洋ができるようになりました。こうして地球は形成とほぼ同時に成層構造をもつようになったと考えられています。

このような地球の誕生はいろいろと詳しく記述されるようになってきましたが、まだまだ多くの謎が残されています。たとえば、原始大気を構成したガスの組成はどのようなものか、原始大気中に酸素はどれくらいあったのか、メタンやアンモニアはどうか、地球の周りを回る月はどのようにしてできたのか。定量的な議論になると皆目手がかりがなくなります。

原始地殻の化学組成も同様で、玄武岩質であったとする説もあれば、安山岩質であったとする説もあり、それらを検証するデータはほとんどありません。研究者たちは、記録のない最初の六億年の謎を解く鍵を求めて、月、火星、金星などの表面に記録された地質学的証拠に注目し、これらの天体に記録された初期の出来事は、地球でも起こったはずと考えている訳で、こうした研究は「比較惑星学」と呼ばれています。

地球がどのようにできたかは、惑星形成論や比較惑星学の研究でおおよそ筋道が描かれるようになり、こうした筋道は「標準モデル」と呼ばれています。「標準モデル」は乳幼児が誕生してから大人になるまでの成長の仕方の一般的抽象を語るようなものですが、特定の乳幼児の生い立ちは扱いません。我々が知りたいのは、我々自身のルーツであり、我々を育んだ地球という固有の天体の歴史なのです。地球には過去に起こった事象が岩石や地層として長期間にわたり残されています。例えば白亜紀の地層から発掘される化石により、現在の地球上の生物からは全く想像もできないような大型爬虫類が地上に君臨していたことを確認することができます。さらに白亜紀末の一層の粘土層からは、それらが小天体の落下による環境の激変に晒され死滅していったことを見て取ることができます。

すなわち、地球のような固体天体では、地層は過去の歴史を記録したテープであり、それらから地球の歴史を判読し組み立てることができます。これはあまりにも当たり前と考えられていますが、惑星の歴史の研究では自明のことではありません。1994年7月、木星の潮汐力で多数の破片に分裂した彗星が次々と木

代	紀	世	×100万年前
新生代	第四紀	更新世 全新世	1.8
	新第三紀	漸新世 中新世	
	古第三紀	漸新世 始新世 始新世	24
中生代	白亜紀	後期 初期	65
		後期 中期 初期	
	三疊紀	後期 中期 初期	
古生代	ペルム紀	後期 初期	245
	石炭紀	後期 初期	
		後期 中期 初期	
	シルル紀	後期 初期	
	オルドビス紀	後期 初期	
	カンブリア紀	後期 中期 初期	
後期 初期			

新生代の地質時代区分

星に衝突しました。衝突することは数カ月前から予測されたため、世界中の天文観測家がこの時望遠鏡を木星に向けました。しかし、現在の木星からは、たった数年前の大規模天体衝突現象の痕跡さえ知る手がかりを得ることはできません。歴史性という意味では、ガスからできた木星が持っている情報と、地層の形成が可能な地球が持っている情報では格段に違います。

地層や岩石から地球の歴史を調べる地質学の基礎は、18世紀に英国の J・ハットンによって提唱され、その後 C・ライエルによって強化されました。ライエルは 1875 年に出版された著書の中で「現在は過去を知る鍵である。」と述べ、現在と同じような地球表層での諸現象が悠久とした時間の流れの中で繰り返され、地球の歴史を刻んできたと主張しました。

しかし、地層は地球の歴史を連続的に記録している訳ではありません。「不整合」といって、いったん堆積した地層が地球表面に露出して浸食によって削り取られたり、断層運動によって異なる時代にできた地層が断層面で接するようになったりしていることのほうが多いからです。

鉱山技師をしていた英国のウィリアム・スミスは、住んでいたオックスフォード周辺の地層から採集される化石を克明に調べ、「異なる地層から異なる化石が産出される。」ことを発見しました。同様のことを、パリ盆地で地層や化石を研究していた J・キュビエも発見しています。18 世紀のことでした。出てくる化石の種類によって地層の新旧が対比できることが解ると、遠く離れた場所に露出する地層についても対比が可能になりました。こうした努力の結果、地球の歴史は産出する化石の種類によって地質時代に区分されるようになりました。

キュビエは化石の種類に基づいて「第一紀」「第二紀」「第三紀」「第四紀」に分類しています。「第三紀」は哺乳類の時代であり、「第四紀」は人類の時代です。キュビエは、「それぞれの時代の終わりに生物の大量絶滅があり、その都度新しい生物が創造された。」と考えました。この考えは「天変地異説」と呼ばれましたが、その後の研究では無視されてしまいました。

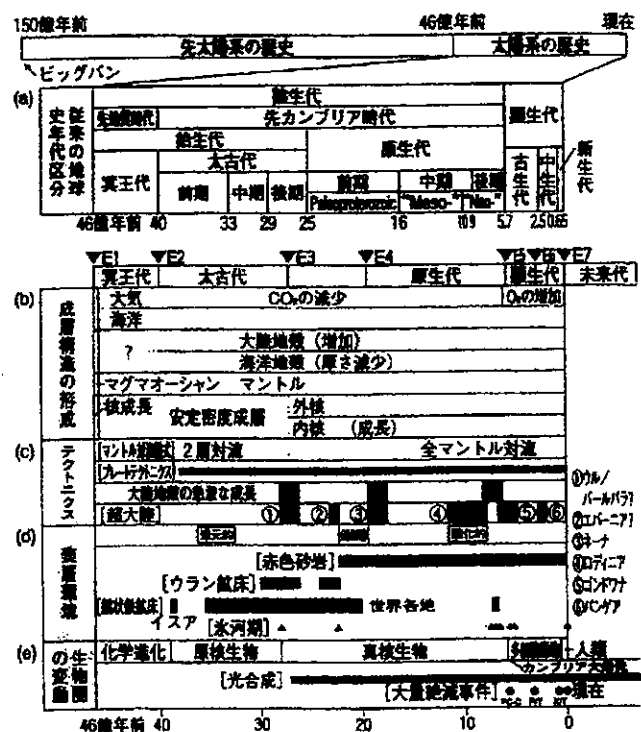
しかしながら「第一紀」は「古生代」、「第二紀」は「中生代」と名称を改めてはいますが、基本的にはその影響を現在まで残しています。その後の研究によって、

「古生代」は「カンブリア紀」「シルル紀」「デボン紀」「石炭紀」「二畳紀(ペルム紀)」に、「中生代」は「三畳紀」「ジュラ紀」「白亜紀」にとさらに細かく区分されています。

一方、カンブリア紀より古い時代の地層からは、ほとんど化石が産出しません。これらの時代は一括して「先カンブリア紀」と呼ばれてきました。

1950 年以降の放射性元素を用いた年代測定によって、先カンブリア紀の始まりは 5 億 7 千万年前(今日では 5 億 4 千万年前と修正されている)であることがわかりました。すなわち、地球の歴史の 8 割が先カンブリア紀であると言えます。

1970 年代以降になると、世界各地で地質学的研究が盛んになります。そして、先カンブリア時代はさらに「冥王代」「太古代」「原生代」に区分されるようになったのです。



新・地球史年表 (a)従来の時代区分(b)~(e)地球史7大事件に基づく地質時代の区分と地球システムの変遷『岩波講座地球惑星科学第13巻地球進化論』の図をもとに修正。

ヤドリギ（宿木・冬青・槲寄生）別名（トビツタ・ホヨ・ホヤ）

双子葉植物綱 バクダン目 ヤドリギ属 ヤドリギ科

北海道から九州・朝鮮半島・中国大陸に分布し、北海道には黄色い果実がなる「ヤドリギ」と赤い果実がなる「アカミノヤドリギ」がある。

さまざまな落葉広葉樹（野幌森林公園ではハンノキ・ハルニレ・ナナカマドに多い）に寄生して生活している。自らも葉緑素を製造することができ「常緑半寄生低木」と呼ばれる木本植物である。

雌雄異株で、花は2月から3月頃に咲き黄色で4～5mmと小さく樹上にあることもあり目立たない。

雄花は枝先の双子葉の間に咲き、花柄も花糸もなく肉厚で4裂した花被片の内側に葯がついている。雌花は当年枝の基部に咲き、4裂した花被片の中央に短い花柱があり子房下位である。

虫媒花で虫により花粉が運ばれるが、北海道の2月から3月は真冬である。どのような虫がポリネーターなのか調べてみたい。

果実は晩秋に熟し、直径6～7mmの液果で中に1個の種子がある。果肉の部分は粘性が強く、学名の *Viscum* は鳥もちの意味で *album* は白いである。的を射た名である。

野鳥のキレンジャクやヒレンジャクが大群で飛来し好んで食べ播種に一役かっている。よく見ると、果実を20～30分食べると水を飲みに行き、樹木の枝で20～30分休む（この時がウンチタイムで種子が排出される）を1日中、種子が無くなるまで繰り返される。休んでいる鳥を見ると、総排泄口から種子をぶら下げていて枝にもぶら下がっているのが見られる。

ある時、果肉のネバネバの粘着力だけで種子がぶら下がることができるのか疑問に思い果実を分解したところネバネバの果肉の中に緑色をした種子があり、その種子に20cmくらいの極細のテグスのような糸が2本ついていることがわかった。

つまり、この糸でぶら下がっていたのである。枝に付着するときは風で振られて付着したり、糸が縮んでいき枝に付着することがわかった。あのネバネバは鳥の腸の中を早く通過するためなのである。

休んでいる鳥は決してお互いが上下に位置することが無く、仲間の糸入りの糞が大切な羽根に付着するのを避けているのがわかる。

無事枝に付着することができた種子は、まず胚軸を伸ばし、その先についている吸盤でしっかりと枝に付着し、その吸盤の内側から寄生根を宿主の導管に差し込み寄生生活が始まる。2年～3年はこの状態で生活し、3年から3年半すると双子葉が開き光合成が始まる。その後、毎年2又分枝を繰り返し増えていく。1mくらいを見ることがあるが相当の年月がたっていると思われる。

寄生された枝を輪切りにすると寄生根はV字形をしたくさび状で枝に沿って伸びていて所々から芽を出して繁殖している。

宿主は多数寄生されると樹勢は衰えるが、ほとんど枯れることはない。宿主を枯らさない様に気を使いながら寄生生活を送っているのかも知れない。

人とのかわりには葉を漢方薬として利用したり、ヨーロッパなどではクリスマスの飾りに利用される。

別名のホヨ・ホヤはヤドリギの古名で、トビツタは木の上で生活することを不思議に思い、きっと飛んで移動していると想像し「飛んでいる鳶」としたとの説がある。

果実を分解するときは敏感な人はツタウルシにかぶれたような症状になるので注意が必要である。

埋 蔵 金 夢 譚

札幌市東区 田村 允 郁

今から半世紀も前の話になります。学校を出て赴任した所は十勝の山奥でした。帯広市のエリアとは名ばかりの場所でした。秋になると、戸蔭別川の河畔林に沿ってヒグマが出没したり、冬になると開墾地跡に残る木の株をダイナマイトで吹き飛ばす伐根が行われていました。ダイナマイトの炸裂する音がドカーン、ドカーンと響き渡っていました。冬の十勝は晴れるとみごとな青空で、ピラミッド形の十勝ポロシリ岳がくっきりと聳えていました。

山奥がゆえに、土曜の午後(当時は土曜の午後から休み)から日曜にかけ何もすることがなく、たまに帯広の市街地に行くくらいでした。そんな暇を持て余している私を引き回してくれた老人がいました。

名を佐藤といい、農業の家業を息子に譲り、私同様ブラブラしている事が多い毎日を過ごしていました。佐藤老人は私をよい相棒と見てとったのでしょう。酒の飲み方や浪曲の指南などをうけましたが、そんな中で、溪流釣りのイロハを学んだことが、その後の私の趣味として今もって続いていることです。

釣りは小学生の頃、フナ釣りぐらいしか経験のない私に溪流釣りの基本、釣り場の見極め、攻め方等々を釣り場で教えてもらいました。釣り方は「餌釣り」か「テンカラ釣り(日本独特の疑似餌釣り)」でした。対象魚はヤマメ、イワナ、オショロコマ、たまにニジマスを釣っていました。釣る川は、住んでいる傍を流れる戸蔭別川の上流や支流の岩内川の上流でしたが、次第に遠出をするようになり広尾市街近くの楽古川まで遠征するようになりました。当時は自家用車を持つ人は少なく、多くの人はバイクを乗り回していました。私もバイクの後ろに佐藤老人を乗せ、ジャリ道を走りまわっていました。

釣りの合間に佐藤老人がよく話していたことがあります。それは、日高山脈を源とし、十勝の地に流れ下る某川の某場所に埋められている埋蔵金の話でした。おもしろおかしいヨタ話と聞き流していましたが、3年間の任務を終え、札幌に転勤後、ションなことからこの埋蔵金の具体的な資料を得ることになったのです。その概略は以下の通りです。

江戸時代の末期、東北三陸海岸一帯や蝦夷地を荒らしまわった「雷神丸」なる船が、松前藩の追跡を逃れ、エリモ岬を迂回し十勝川の河口にたどり着きました。積み込んでいた金銀財宝を荷揚げし、日高山脈の奥地に隠しました。隠した場所は「チョマナイ」の洞窟でした。チョマナイとはアイヌ語で魔の沢との意味があります。ですから、この洞窟は簡単にいきつくことのできない危険な場所であったと推測できます。雷神丸はその後、難破して大方の乗組員は溺死し、生き残った者もちりじりになってしまいました。

この埋蔵金はどうなったのか、だれもが気になるところです。口伝によると、生き残った雷神丸の船頭なる者が身を隠し青森に住んでいましたが、年老いて死をむかえ臨終の際、息子を呼んで地図を渡し埋蔵金の秘密を打ち明けたのです。息子はその地図を頼りに探し歩きましたが、肝心の地図は古い記憶を辿ったもので、埋蔵金を探し当てる事はできませんでした。

それから時は流れ、明治30年の後半、日高山脈の中央部、中日高の神威岳の山麓の獵師の住家にみすばらしい老人が訪れ、食事と宿泊を乞い、その礼とし黄金小判を置き立ち去りました。2年ほどたちいつぞやの老人が連れを伴い獵師の所を訪ねてきました。獵師には金鉱探しだと言い、3、4日どこかへ出かけましたが、帰ってきたときはひどく落胆した様子でした。それから二人は多くの食料を持って

出かけましたが、獵師のもとへは戻ってきませんでしたし、二人の消息を知る者はいませんでした。この老人こそ雷神丸の乗組員だと、この話に興味を寄せる人達には信じられています。

それからまた10年程たったころ、やはり神威岳山麓の「茂寄」という部落に一人の行者が漂然と現れました。しばらく神威岳の周辺を歩き回った後、不思議な予言をして姿を消しました。その予言とは「チョマナイの洞窟の埋蔵金は、ほんの一部だけとりだされたが、その多くは残っていると。洞窟内には黄金が詰まった箱が三つあり、その傍には黄金の燭台を抱いた白骨が一体、さらに一体は洞窟の入口に横たわっていると。しかし、チョマナイの洞窟にたどりつく道は厳しく、当分この洞窟には辿りつくことはできないであろう。この埋蔵金が明るみになるのは、ほぼ50年後になるであろう」と。

チョマナイの洞窟がある川及び上流部分の沢はどこなのでしょう。埋蔵金を探し求める人達の多くは神威岳に絞り込みをかけています。地図をみると候補の川は、ヤオロマップ川、中ノ川、豊似川が挙げられます。埋蔵金ハンターは特に有力な川として「中の川」にポイントを絞っています。それは「中の川」が日高山脈の沢のなかで第一級の悪沢であり、チョマナイ(魔の沢)の名にふさわしいからです。

埋蔵金探索の候補の一つではありますが、私はこの「中の川」説には疑問をもっています。その理由として幾つかの見解を持っているのです。

- ①雷神丸が上陸した地点は十勝川の河口となっていますが、沼や湿地が多く、また、中の川までの距離も遠く、むしろ広尾に近い海岸線から上陸したのでしょう。
- ②そうすると、日高山脈を源とする川を海岸線から並べると、札楽古川、楽古川、野塚川、豊似川などが挙げられます。
- ③これらの川には何度もヤマメ釣りで上流部分まで行って、埋蔵金探索のポイント地点はチェック済みです。

これ以上の詳細については語ることはできません。私にとって最高の秘密事項だからですが、一つだけヒントを話します。それは、かつて神威岳山麓での行者の予言です。50年後に埋蔵金が明らかになるとのご宣託でしたが、明らかになっていません。なぜか?、それは、台風や大雨で沢筋が変わったからではないか。ちょうど50年の節目、昭和29年の洞爺丸台風による災害です。であれば沢筋が昔より極端に変わった所、斜面の崩落した所を重点的に探索すればよいのです。

山奥で3年間の務めを終え、札幌への転勤になりましたが、佐藤老人のさびしげな顔を見て何とも複雑な気持ちになったことを今でも思い出します。札幌へ移動しても夏になると必ず十勝の地を訪れ、ヤマメ釣りにいそしみました。私が集めた埋蔵金の資料の話を佐藤老人は満足げに聞いてくれました。

広尾近郊の幾つかの川も探索に二人で行きましたが、80歳を越えて間もなく、あっけなく佐藤老人はこの世を去りました。以後、夏になると十勝の地で単独釣行を続けてきましたが、出会った時の佐藤老人の年齢に私もなっていました。しかし、埋蔵金探索の夢は今も衰えていません。

冬の今の時期、時折コーヒーをすすりピーナツや柿の種をポリポリ食べながら、集めた埋蔵金の資料を読み返すと、気分が高揚してきます。

埋蔵金は今もチョマナイの沢の洞窟に静かに眠っているのです。

自然観察 NOW

野幌森林公園自然情報

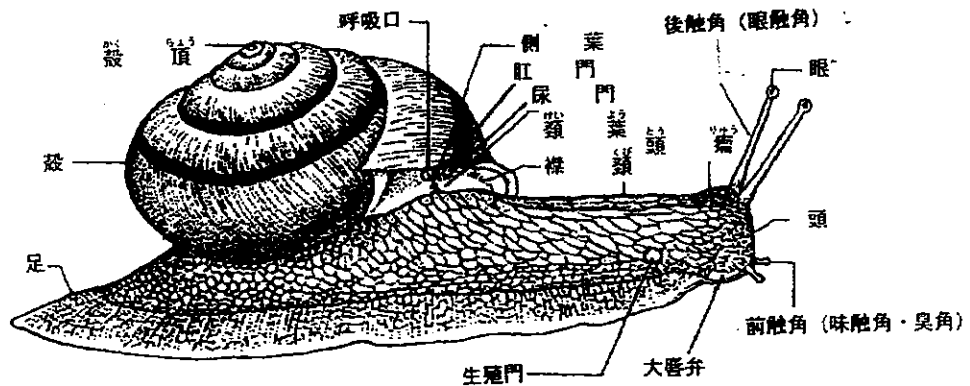
平成26年度 No.7.

平成26年11月9日

北海道ボランティア・レンジャー協議会

カタツムリ

軟体の外形図



蝸牛「カギユウ」 英語 land snail アイヌ語 ケメチ エトウンペ

軟体動物門 腹足綱 有肺亜綱のうち、陸上に生息し、特に後触角（眼触角）の先にある種類（柄眼類）をさす。世界に約2万種、日本に約700種、北海道に約64種、野幌森林公園に約16種生息している。

移動能力が小さく、山や乾燥地、河川などを越えて分布を広げることができないため、地域ごとの種の分化が多い。生息する島の名前や地方の名前が付いた種が多い。

カタツムリはマイマイ目の陸に住む有肺類巻貝の総称である。

ナメクジもカタツムリの仲間である。

柳田國男 著「蝸牛考」方言周圏論でおなじみですが、地方によって呼び名が違いおもしろい。青森カズムリ、宮城デンナムス、山形カツマリ、茨城メーヅロ、群馬ツンデロ、東京カツマリ、神奈川カツマリ、秋田カツマリ、岩手ナト、新潟デアロ、山梨メンゴヨ、香川デンンゴ、福岡マイイ、長崎ウマカジ、熊本ウナカジ、佐賀カツムイ、大分ゼンゼンシ、沖縄チオンなどで、その他の地方はデンナムシと呼ばれていることが多い。

身体

軟体部分は網目状で粘液で湿っていて背にはカルシウム質の5～6段（種により異なる）のらせん状に巻いた殻（種により右巻と左巻がある）を背負っている。

全てのカタツムリは軟体部分が湿っていないと生きていけない。

冬は乾燥から身を守るため、殻の入り口に粘液で固めた膜（エピフラム）を張り、小さな呼吸するための穴をあけて落ち葉などの下で冬眠する。夏も高温状態や少雨状態が続くと冬眠と同じ状態で夏眠する。その状態は殻に現われるが見分けは難しい。

頭には先端に眼がある後触角（眼触角）と味や臭いを感じる前触角（味触角・臭角）がある。

軟体が殻から出る部分に小さな穴（呼吸口）があり、その穴の内部に外套膜があり壁には細かい血管が密に貼り廻られ酸素を補給している。鰓はない。

食性

口には顎板と、おろし金状の齒舌があり齒舌を食物にすりつけ削り取って食べる。餌は主に植物の若葉が多い、木の子や野菜なども食べるためウスカワマイマイやチャコウラナメクジなどは有害とされる。雑誌に群がって食べているところを見かけるが糞の色が雑誌のインクの色がそのまま出ていることがある。

排出した糞は自分の足で丸めて始末をするため、長いまま放置されることはない。

よくコンクリート壁に多数群がっていることがあるが自分が背負う殻がカルシウム質であるためカルシウムの補給のためコンクリートを削って食べる。死んだカタツムリの殻も良く食べる。

生殖

雌雄同体で雌の機能と雄の機能を体内にもっている。生殖口は右巻きの場合は右側に左巻きの場合は左側にあり内部は、それぞれの機能に分かれる。生殖行動はお互いに陰茎を差し入れて精子を交換する。

自家受精することもあるが稀である。動きの遅い動物は雌雄同体が多い、雌雄別の場合交配して受精できる確率は50%であるが同体だと100%になる。産卵は5月から7月が多く、種類により異なるが9個から20個が多い、卵は浅く掘った地中に産む。卵は気温20℃で21日から22日でふ化し、30日から90日で1年目の殻の成長を完了、100日から120日で交尾、その後6日くらいで産卵する。

交配時は後触角の間の頭瘤部が盛り上がり性フェロモンを出し、カルシウム質の恋矢でお互いを刺し刺激し合う。唱歌の「角出せ槍だせ目玉だせ」の槍は恋矢のことかも？

寿命

小さな種では約1年、大きい種では約3年といわれキセルガイの仲間の飼育では15年という記録があるが、あまりくわしいことはわかっていない。

成体と幼体

同定をする場合は、まず成体か幼体かを見極める必要がある。

成体と幼体の見分け方は非常に難しく、同種の場合は外唇が外側にめくれていると成体、めくれていないと幼体である。

ウスカワマイマイは成体でも外唇がめくれないので注意が必要である。

観察会での見せ方

プラスチックの板に止まらせて観察すると口や足の裏などが見ることが出来、手を汚すことなく観察することが出来るので便利である。

カタツムリの仲間は広東住血線虫・肺蛭・肝蛭などの一次寄主となっていることがあり素手でつかむと口腔や傷口などから体内に入る恐れがあり、つかんだ場合は手をよく洗い乾燥させることが必要である。

種類

殻径・殻高ともに数mmと非常に小さな種が多く、野幌森林公園の観察会ではオカモノアラガイ・エゾマイマイ・ヒメマイマイ・サッポロマイマイを覚えていれば支障はないが、興味があれば小さな種類も観察してください。まだまだ未知の部分があり野幌森林公園にいないとされている種や新種を発見できるかも？

観察会のご案内

- | | | |
|--------------|-----------------------|--------------|
| ※ 西岡水源池自然観察会 | 11月23日(日) 10:00~12:30 | 西岡公園管理事務所前集合 |
| ※ 円山登山観察会 | 1月18日(日) 10:00~12:30 | 円山八十八カ所登山口集合 |
| ※ 冬の森の観察会 | 2月15日(日) 10:00~12:30 | 自然ふれあい交流館集合 |
| ※ 森の中で春を探そう | 3月22日(日) 10:00~12:30 | 自然ふれあい交流館集合 |

蝸牛「カギユウ」 英語 land snail アイヌ語 ケメチ エトウンペ

軟体動物門 腹足綱 有肺巻貝のうち、陸上に生息し、特に後触角（眼触角）の先に眼がある種類（柄貝類）をさす。世界に約2万種、日本に約700種、北海道に約64種、野幌森林公園に約16種生息している。

移動能力が小さく、山や乾燥地、河川などを越えて分布を広げることができないため、地域ごとの種の分化が多い。生息する島の名前や地方の名前が付いた種が多い。

カタツムリはマイマイ目の陸に住む有肺類巻貝の総称である。

ナメクジもカタツムリの仲間である。

柳田国男 著「蝸牛考」方言圏論でおなじみですが、地方によって呼び名が違いおもしろい。

青森カヌリ、宮城デンナム、山形カヅブリ、茨城メーヅブリ、群馬ツンゴロ、東京カヅブリ、神奈川カヅブリ、秋田カヅブリ、岩手ナト、新潟デアロ、山梨メンゾ、香川デンゴ、福岡マイマイ、長崎ウマヅ、熊本ウマヅ、佐賀カヅブリ、大分ゼンゼン、沖縄フナなどで、その他の地方はデンナムシと呼ばれていることが多い。

身体

軟体部分は網目状で粘液で湿っていて背にはカルシウム質の5～6段（種により異なる）のらせん状に巻いた殻（種により右巻と左巻がある）を背負っている。

全てのカタツムリは軟体部分が湿っていないと生きていけない。

冬は乾燥から身を守るため、殻の入り口に粘液で固めた膜（エピフラム）を張り、小さな呼吸するための穴をあけて落ち葉などの下で冬眠する。夏も高温状態や少雨状態が続くと冬眠と同じ状態で夏眠する。その状態は殻に現われるが見分けは難しい。

頭には先端に眼がある後触角（眼触角）と味や臭いを感じる前触角（味触角・臭角）がある。

軟体が殻から出る部分に小さな穴（呼吸口）があり、その穴の内部に外套膜があり壁には細い血管が密に貼り廻られ酸素を補給している。鱗はない。

食性

口には顎板と、おろし金状の歯舌があり歯舌を食物にすりつけ削り取って食べる。餌は主に植物の若葉が多い、木の子や野菜なども食べるためウスカワマイマイやチャコウラナメクジなどは有害とされる。雑誌に群がって食べているところを見かけるが糞の色が雑誌のインクの色がそのまま出ていることがある。

排出した糞は自分の足で丸めて始末をするため、長いまま放置されることはない。

よくコンクリート壁に多数群がっていることがあるが自分が背負う殻がカルシウム質であるためカルシウムの補給のためコンクリートを削って食べる。死んだカタツムリの殻も良く食べる。

生殖

雌雄同体で雌の機能と雄の機能を体内にもっている。生殖口は右巻きの場合は右側に左巻きの場合は左側にあり内部は、それぞれの機能に分かれる。生殖行動はお互いに陰茎を差し入れて精子を交換する。

自家受精することもあるが稀である。動きの遅い動物は雌雄同体が多い、雄雌別の場合交接して受精できる確率は50%であるが同体だと100%になる。産卵は5月から7月が多く、種類により異なるが9個から20個が多い、卵は浅く掘った地中に産む。卵は気温20℃で21日から22日でふ化し、30日から90日で1年目の殻の成長を完了、100日から120日で交尾、その後6日くらいで産卵する。

交接時は後触角の間の頭瘤部が盛り上がり性フェロモンを出し、カルシウム質の恋矢でお互いを刺し刺激し合う。唱歌の「角出せ槍だせ目玉だせ」の槍は恋矢のことかも？

寿命

小さな種では約1年、大きい種では約3年といわれキセルガイの仲間の飼育では15年という記録があるが、あまりくわしいことはわかっていない。

成体と幼体

同定をする場合は、まず成体か幼体かを見極める必要がある。

成体と幼体の見分け方は非常に難しく、同種の場合は外唇が外側にめくれていると成体、めくれていないと幼体である。

ウスカワマイマイは成体でも外唇がめくれないので注意が必要である。

観察会での見せ方

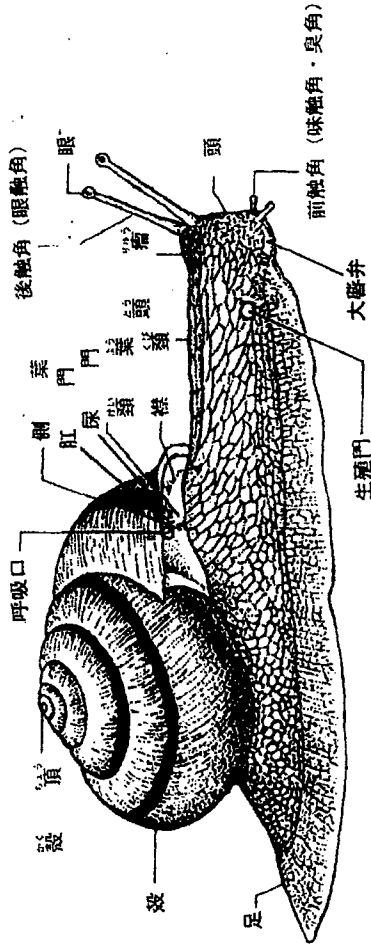
プラスチックの板に止まらせて観察すると口や足の裏などが見ることが出来、手を汚すことなく観察することが出来るので便利である。

カタツムリの仲間は広葉住血線虫・藤巻・肝蛭などの一次寄主となっていることがあり素手でつかむと口腔や傷口などから体内に入る恐れがあり、つかんだ場合は手をよく洗い乾燥させることが必要である。

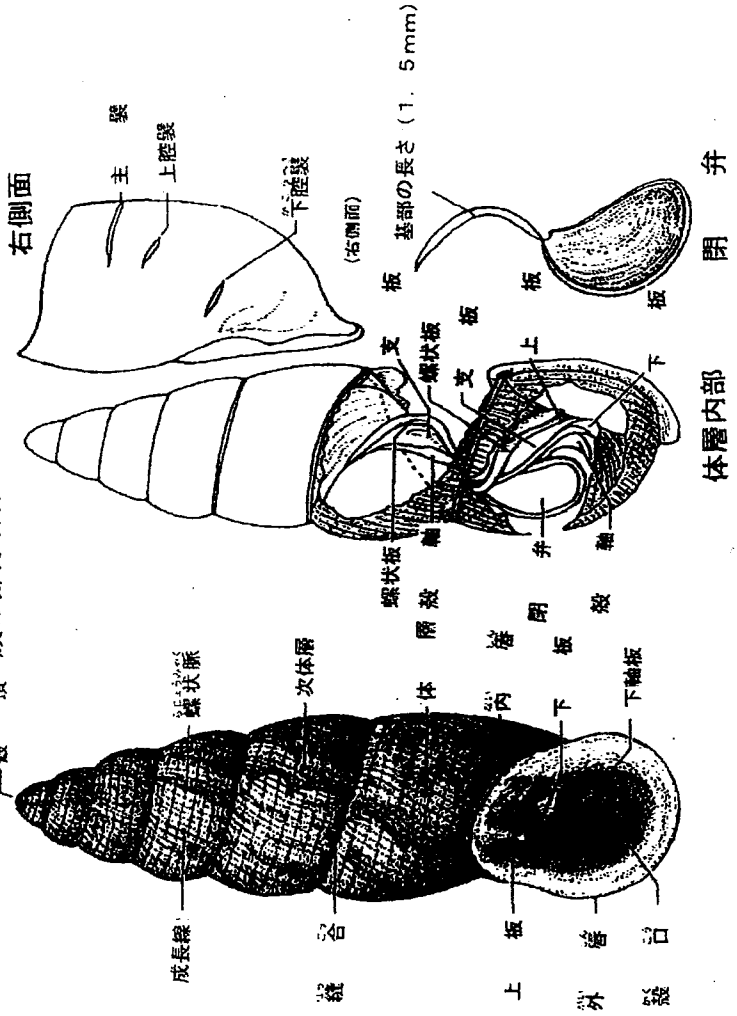
種類

殻径・殻高ともに数mmと非常に小さな種が多く、野幌森林公園の観察会ではオカモノアラガイ・エゾマイマイ・ヒメマイマイ・サッポロマイマイを覚えていれば支障はないが、興味があれば小さな種類も観察してください。まだまだ未知の部分があり野幌森林公園にいないとされている種や新種を発見できるかも？

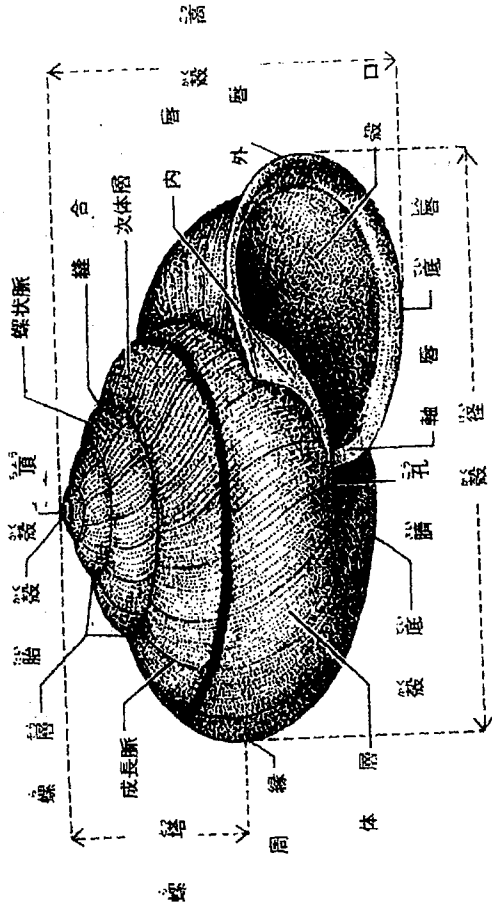
軟體の外形図



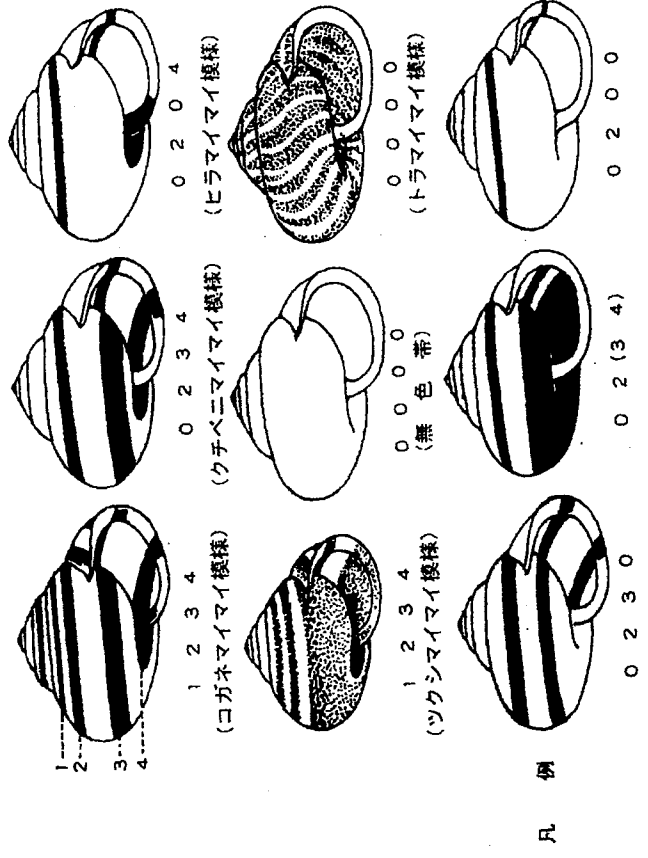
殼の部分名称



貝殻 (右巻き) 各部の名称



色帯



凡例

北海道産産貝類目録

腹足綱

前腹足綱

原始腹足綱

ヤマキサゴ科

1 *ハコダテヤマキサゴ(H3.0×D5.0) 4層

中腹足目

ヤマタニシ科

2 ミジンヤマタニシ(H1.2×D1.8) 4層

ゴマガイ科

3 ヒダリマキゴマガイ(H2.0×D1.0) 5層

4 *オウマヒダリマキゴマガイ(H2.0×D1.0)

5 エソゴマガイ(H2.9×D1.5) 渡島半島

クビキレガイ科

6 クビキレガイモドキ(H4.3~4.7×D1.8)

有肺亜綱

基眼目

ケンガイ科

7 *ケンガイ(H2.3×D0.8)

有肺亜綱

新眼目

オカモノアラガイ科

8 *オカモノアラガイ 3・1/4層

9 ナガオカモノアラガイ (H18.0×D・・)

ヤマホタルガイ科

10 *ヤマホタルガイ(H6.0×D2.7) 5・1/2層

キバサナギガイ科

11 ナタネキバサナギガイ(H3.3×D1.8) 8・1/2層

12 ヤマトキバサナギガイ(H1.7×D1.0) 5層

スナガイ科

13 ヒラセスナガイ 種内地方

14 *ナガナタネガイ(H2.1×D0.6) 6層

ミジンマイマイ科

15 エソミジンマイマイ 釧路地方

16 ミジンマイマイ(H1.0×D2.0)

マキゾメガイ科

17 マキゾメガイ(H3.2~4.0×D・・) 種内地方

キセルガイモドキ科

18 フトキセルガイモドキ(H3.5×D1.0) 8・1/4層

19 クリイロキセルガイモドキ(H2.5×D0.8) 7・1/2~8層 南西部

20 エソキセルガイモドキ (H2.5×D0.5) 8層

キセルガイ科

21 オクシリキセル 奥尻島

22 エソヒメキセル(H11.2×D2.3) 9・1/2層 南西部

23 サッポロキセル(H14.0×D2.8) 10層 中南部

24 エソコキセル(H10.5×D2.3) 8・1/2~9層 南部

オカクチキレガイ科

25 オカチョウジガイ(H10.0×D3.3) 8・1/2層

26 ホソオカチョウジガイ(H8.0D2.0)

ナタネガイ科

27 オオベソナタネガイ(H11.0×D2.5) 3層 視察・釧路地方

28 エソナタネガイ 釧路地方

バツラマイマイ科

29 *バツラマイマイ(H3.3×D0.5) 4・1/2層

コハクガイ科

30 エソエンサガイ(H2.0×D3.0) 5・1/3~6層 釧路地方

31 *チシマコハクガイ(H・・×D0.8) 日本最小

32 #ヒメコハクガイ(H1.3×D2.1)

33 #ウスクチベッコウ(H14.0×D7.5) 4・2/3層

34 #コハクガイ(H2.5×D5.0)

35 *コハクモドキ(H2.1×D4.0) 東部以北

36 ヒメコハクモドキ(H1.2×D4.0) 3・1/2層 南西部

37 オオコハクガイ(H3.0×D7.0)

ナメクジ科

38 *ナメクジ (L40.0×W10.0)

コウラナメクジ科

39 #コウラナメクジ

40 ノナメクジ(L20.0~30.0)

41 #チャコウラナメクジ(L70.0~80.0)

42 #キイロナメクジ(コウラナメクジ) (L12.0~15.0)

ベッコウマイマイ科

43 *タカキビガイ(H・・×D2.9)

44 *オオキビガイ(H5.5×D6.5) 8・1/2層 南部

45 *エソキビガイ(H2.0D2.8) 5・1/2層

46 *エソヒメベッコウ(H・・×D4.9)

47 ホツカイドウベッコウ

48 ヒメカサキビ(H3.1×D・・)

ナンバンマイマイ科

49 エソピロウドマイマイ(H13.5×D18.0) 4・1/2層 利尻・礼文地方

オナジマイマイ科

50 *サッポロマイマイ(H21.5×D33.0) 6層

51 *ヒメマイマイ(H11.0~16.0×D18.0~30.0) 6層

52 タカヒデマイマイ(H7.0~10.0×D12.0~15.0) 5層 余市地方

53 アボイマイマイ(H4.2×D9.8) アボイ岳周辺

54 ホンプレイキマイマイ(H16.0~23.0×D23.0~33.0)

北東部・礼文島

55 *エソマイマイ(H31.0×D38.0) 5・1/4層

56 ウスカワマイマイ(H20.0×D25.0) 5層

57 ブドウマイマイ(H28.0×D30.5) 4・3/4~5層 黒岳・余市

58 オナジマイマイ(H10.0×D15.0)

・ 北海道生息種の64種

#=移入種

*=野幌森林公園に生息種

H=殻高

D=殻径

L=長さ

W=幅

単位=mm

事務局だより

1. レベルアップ研修会 「森林がもたらす様々な恵み」

日 時：平成 27 年 2 月 28 日（土） : 13 時 30 分～15 時 00 分

場 所：野幌森林公園 自然ふれあい交流館 レクチャールーム

講 師：北海道大学農学部森林生態系管理学研究室 中村 太士 教授

申し込み：自然ふれあい交流館

電話：011-386-5832 メール：nfpvc@kaitaku.or.jp

2 月 1 日（日）～21 日（土）、9：30～16：30 の間をお願いいたします。先着 40 名です。

参加費：無料です

2. 冬の森の観察会（共催）平成 27 年 2 月 15 日 10:00～12:30 集合場所：自然ふれあい交流館

担当 小林・大表

下見会 平成 27 年 2 月 14 日 9 時 45 分～ 話題提供 土屋忠司氏 「公園の種類②」

3. 森の中で春を探そう観察会（共催）平成 27 年 3 月 22 日（日）10:00～12:30

集合場所：自然ふれあい交流館 担当 内山・新谷

下見会 平成 27 年 3 月 21 日 9:45～ 話題提供 小林英世氏 「クマゲラ」

4. ボランティア保険について加入希望者は事務局へ同封のハガキで申し込みください。

当会のボランティア保険は当会の事業に参加する**主催者側**ボランティアを守る保険です。様々なボランティア活動を行う方は個人で加入してください。

当会の事業（観察会、研修会）に参加される方は保険に加入してください。保険に加入していない場合は自己責任となります。

保険は札幌市の社会福祉協議会、ボランティア保険の A 型（300 円）、4 月から翌年 3 月

加入希望者は 3 月 20 日までにハガキを送付してください。

事務局 室野

編集後記

- ※ 元会長で顧問の川端功治さんが昨年11月ご逝去されました。ボラレンのために熱心に情熱を注いで下さったことが記憶に残ります。感謝と共にご冥福をお祈りいたします。
- ※ 昨年7月開催しました鶴川研修時の川村桂介さん作成の資料と道北研修時の道場優さんの植物リストを掲載しています。拝見していると自然環境が読み取れるような詳しさです。
- ※ 今号より顧問の田村允郁さんのエッセイを連載いたします。成田伸一さんの連載と共に楽しみです。
- ※ 会員の「活動お知らせ」ページを設けました、地元で団体や個人で活動している会員の方々の様子やその内容などをお知らせいただけましたら有難いです。イラスト、写真などでのお知らせでも結構です。
- ※ 今月号に掲載出来ませんでした、原稿は次号に繰り越しいたしますのでご了承下さい。
- ※ 会員皆様の原稿で作られる「エゾマツ」です。次号、春季号は3月27日発行予定です。原稿は随時募集していますのでメールまたは郵便で下記まで送付お願いいたします。

Eメール ukhisui@kke.biglobe.ne.jp

〒 069-0841

江別市大麻元町 164-39

内山恭子

『エゾマツ』冬季号 111

2015年1月30日発行

会長 春日順雄